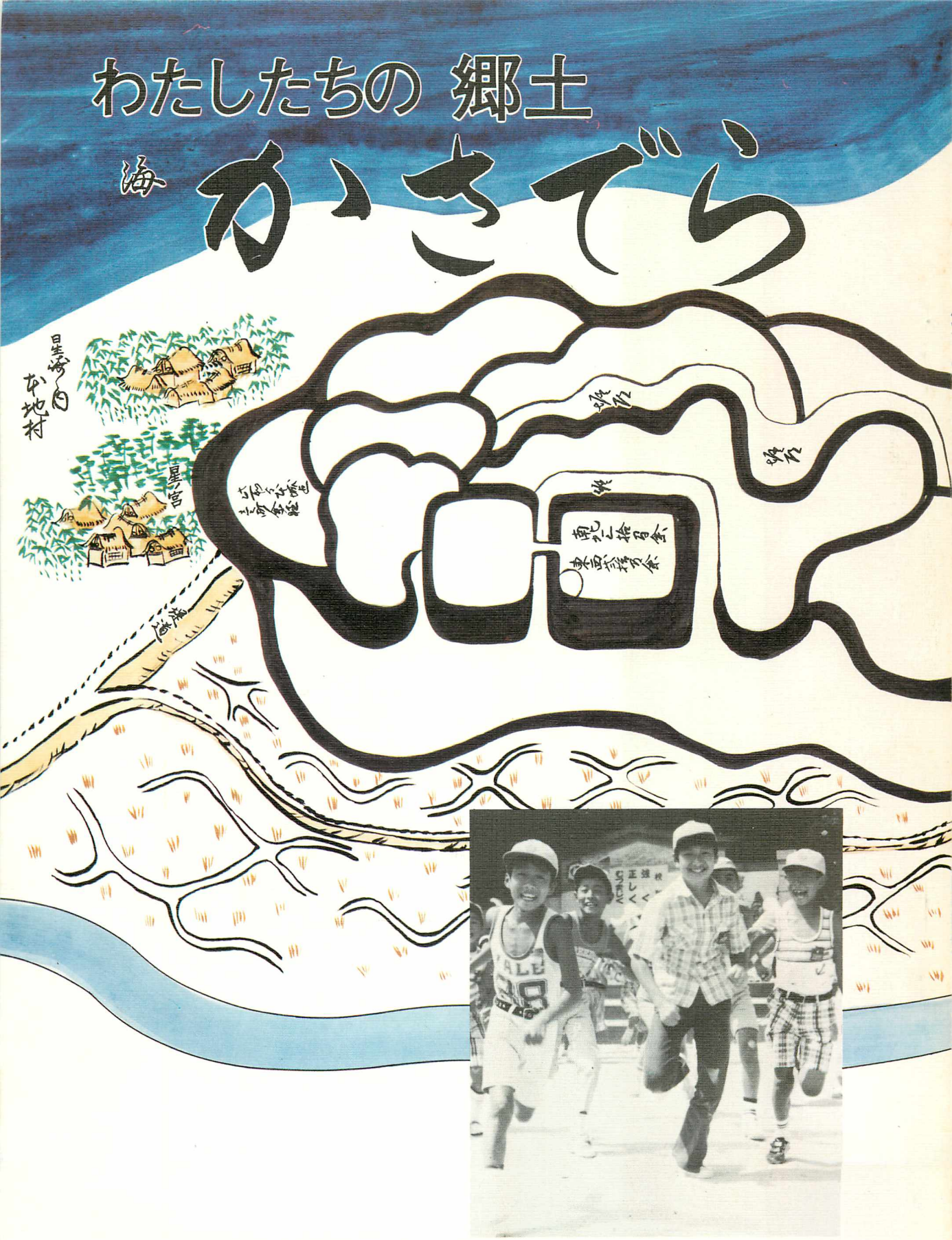
わたしたちの郷土

海かさでら



名古屋市立笠寺小学校

はじめに

みなさんの住んでいる郷土―笠寺は、数千年もの長い歴史をもつ町です。

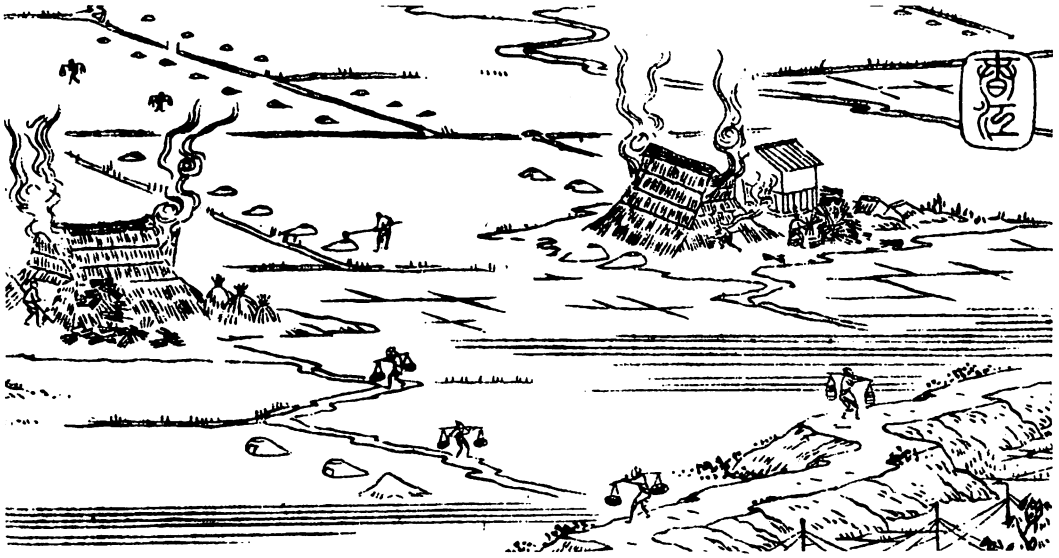
この本には、大昔から現在にいたる笠寺のようすが、わかりやすく書かれています。みなさんが学習しやすいように、写真や資料もたくさんのせてあります。

みなさんは、この本の中から、昔の人々の生活のようす、その移り変わり、そして、町をよくするための人々の努力などを、しっかり読みとってほしいと思います。

そして、かけがえのない郷土をさらに発展させるために、何をしていったらよいのか、よく話しあい、考えていってほしいと思います。

昭和五十四年三月一日

名古屋市立笠寺小学校長　神　戸　文　雄



わたしたちの郷土

かさでら

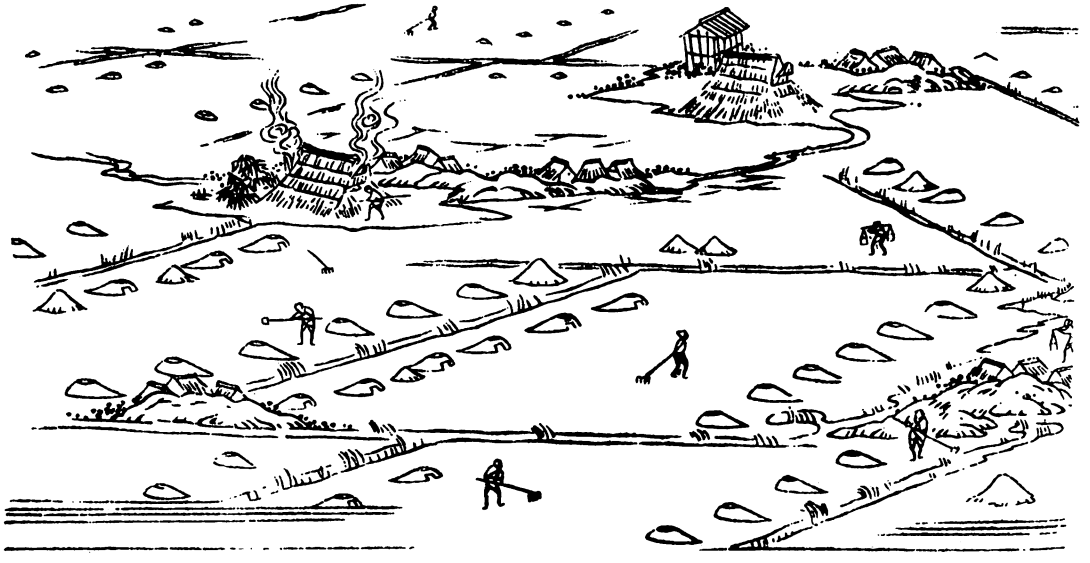


表　紙　名古屋市蓬左文庫蔵「愛知郡星崎村古城之図」
表紙裏　学区航空写真　昭和五十二年十月五日撮影
はじめに　笠寺小学校長　神戸文雄
とびら　尾張名所図会「星崎」より、塩浜の景

もくじ

第一部　わたしたちの町のようす

一　学校の屋上から……1
(一)　北の方のようす……1
(二)　東の方のようす……2
(三)　南の方のようす……3
(四)　西の方のようす……3
二　町のようす……4
(一)　住宅の町……4
(二)　商店の町……6
(三)　工場の町……8
(四)　ほかの地いきとのつながり……9

学区略図

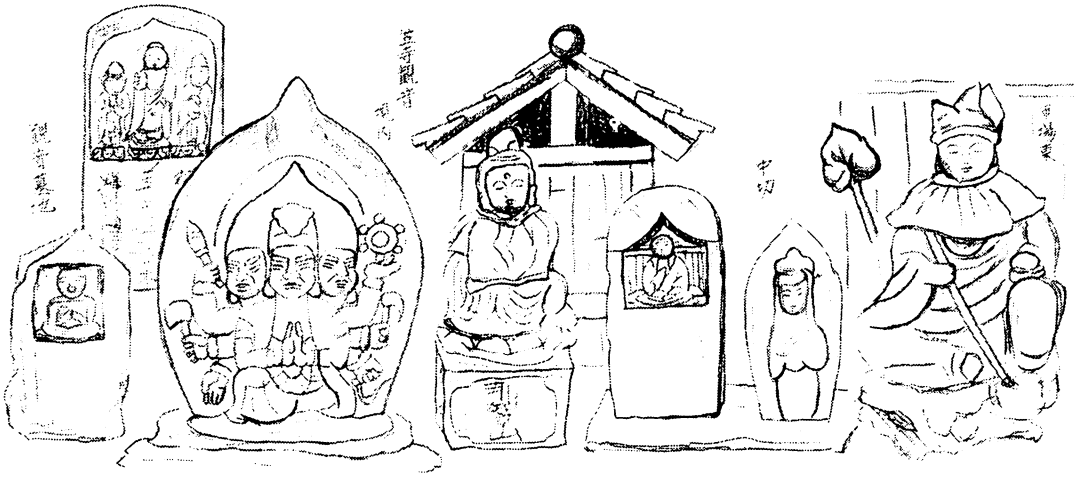
第二部　わたしたちのまちのうつりかわり

一　むかしのようすを伝えるもの……16
(一)　古い遺跡……16

(二) 伝説 …… 21
(三) むかしのお祭り …… 24
二 くらしのうつりかわり …… 27
(一) 大むかしから江戸時代まで …… 27
(二) 明治になって …… 39
(三) 大正の時代 …… 45
(四) 昭和に入って（昭和十二年ごろまで） …… 48
(五) 戦争のあらしの中で（昭和十三年―二十年） …… 51
(六) よみがえるわたしたちの町 …… 55

第三部　学校のあゆみ

一 学校ができたころ …… 61
二 大道に学校があったころ …… 62
三 今の場所に校舎ができたころ …… 66
四 戦争がはげしくなったころ …… 69
五 たち上がる笠寺小学校 …… 73
六 発展する笠寺小学校 …… 75
学区の歴史年表 …… 77
学区の遺跡地図 …… 79
参考文献 …… 79
あとがき …… 79
裏表紙裏　学校の現況と沿革



学　校　の　北

第一部　わたしたちの町のようす

高いところに登ると町全体のようすをながめることができます。

一、学校の屋上から

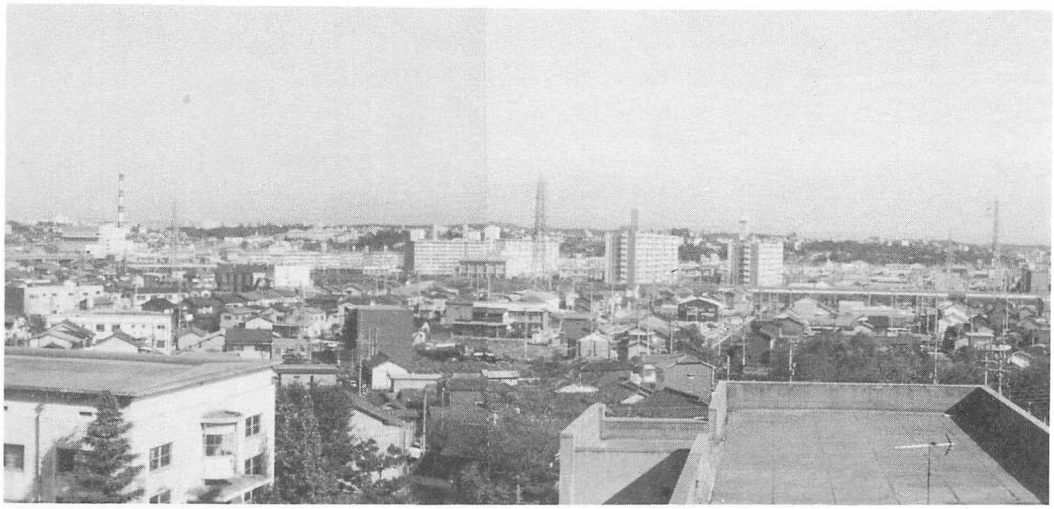
㈠　北の方のようす

手前から善東寺、①丹八山、七所神社、②笠寺観音へと、③森をたどると小高い土地が細長く続いていることがわかります。

善東寺の手前を弦月宝生線が東西に通っています。

七所神社の左手には、本城中学校や区役所が見られます。その間を前浜通が東西に走り、本城中学校のあたりから北へ曲がって、笠寺観音の方へ通じています。

笠寺観音の左手には、スーパーや銀行、保健所などのビルが建ちならんでいます。名鉄の本笠寺駅もあり、このあたりは、笠寺学区でいちばんにぎやかな所です。



学　校　の　東

笠寺観音の手前を旧東海道が東西に通っています。少し東へ行った所に一里塚があります。道にそった古い家も、昔のおもかげを残しています。

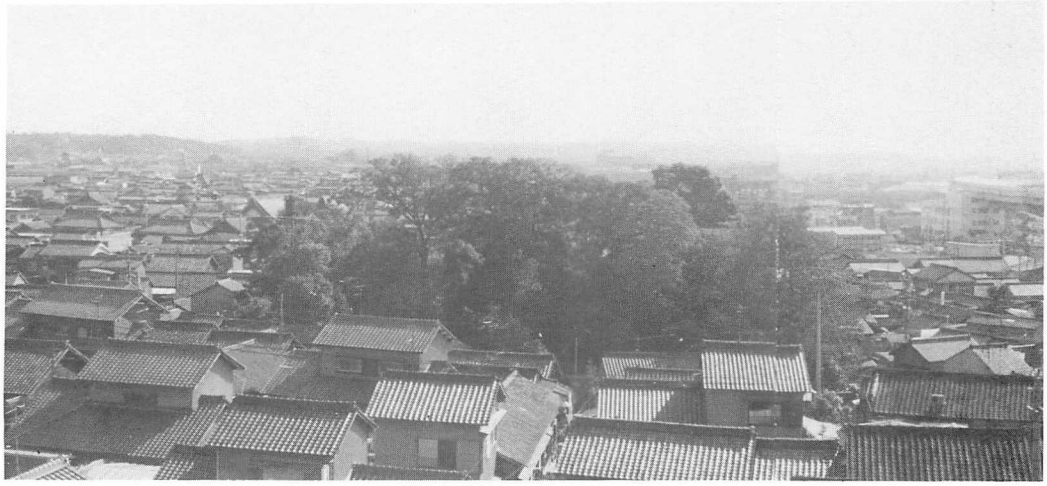
(二)　東の方のようす

学校のすぐ東を、南北に名鉄が走っています。名鉄線にそって南の方へ目を移していくと名南工業高校の建物が見えます。その手前に名鉄本星崎駅があります。

名鉄本線の向こうに、天白川の堤防が長く続いています。

名鉄線と天白川の間には、茶や青など、色がわらの新しい家が建ちならんでいます。また、空地が残っているのが見られます。

天白川の向こうは緑区になります。赤と白にぬり分けられた鳴海工場のえんとつが目につきます。家庭や工場から出るごみを燃やす所で、そのときの熱を利用した温水プールが近くにあります。右手の鉄筋コンクリートの高い建物は、県営鳴海団地です。



学　校　の　南

㈢　南の方のようす

南の方には高い建物はほとんど見られません。ふつうの家がたくさん集まっています。東の方の家に比べると、古い家が多いのに気づくでしょう。

たくさんの家が建ちならぶ中に、大きな木がしげっている森が見えます。ここが星宮社です。

星宮社の南の方は、ずっと向こうまで低くなっています。遠くの方には、高い丘が続いているのが見られます。その中にみんなが遠足などでよく出かける大高緑地公園があります。

㈣　西の方のようす

学校と同じくらいの高さの所を、高速道路が南北にのびています。その下を通っているのは、国道一号です。

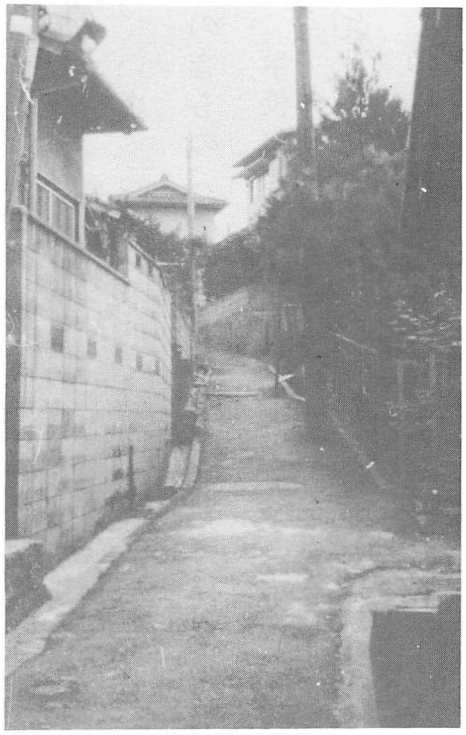
高速道路の向こうには、国鉄の東海道本線や新幹線が南北に通っています。右の方には、国鉄笠寺駅があります。

学校から国道一号までの間はふつうの家が多く、国道一号から

向こうは会社名のついた建物や、高いえんとつのある建物が多いのに気づくでしょう。そして、それらの建物はみな、学校より低い所に建っています。国鉄線路の向こうには、もっとたくさんのえんとつが見られます。そのあたりの空は、学校のあたりの空の色とはちがうように見えます。

二、町のようす

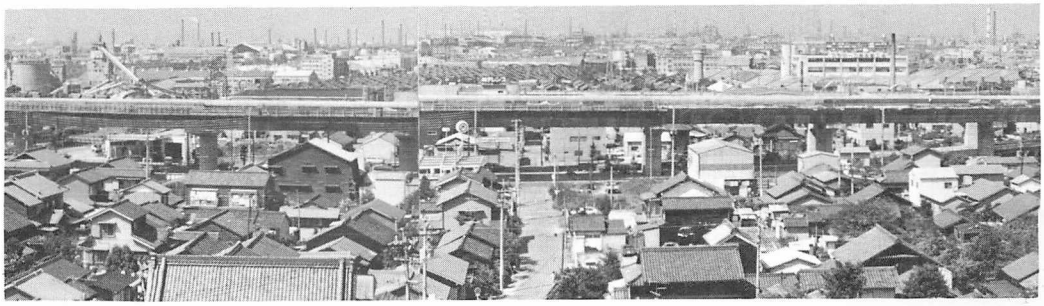
町を歩いて、実際に見たり聞いたりすると、ようすをくわしく知ることができます。


坂道のある町

(一) 住宅の町

学校の北の方、市場や中切のあたりは坂道や曲がりくねったせまい道が多く、自動車では通れない所もあ

学校の西

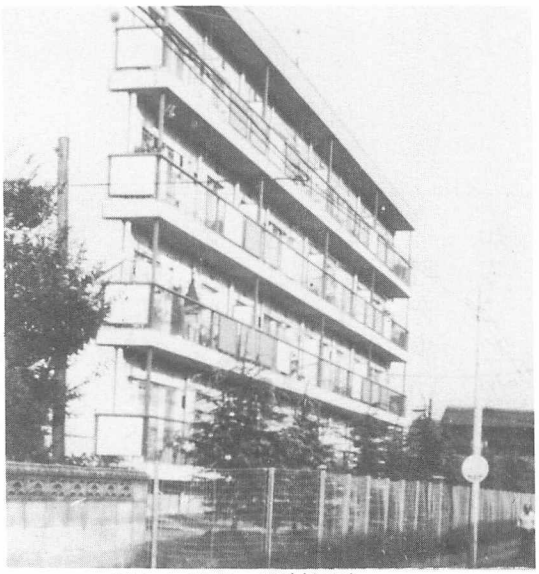


ります。このあたりは、ずいぶん昔から家が建っていた所です。黒いかわらぶきの大きな屋根があり、その前の庭を囲むように、物置小屋の建っている家、それが農業をやっていたころの代表的な家の造りです。このあたりは商店も工場もほとんどなく、自動車の音もめったに聞こえない静かな住宅の町です。

学校の西、廻間から寺坂にかけてや、南の大道のあたりも古くから家の建っていた所です。

学校の東、本城町や星宮町は新しくできた町です。はば五メートル以上もあるまっすぐな道がたて横に通り、公園もつくられています。道にそって、さまざまな色、形、大きさ、材料の家が建っています。

わりに土地が高く畑の多かった本城町には、今もところどころに畑が残っています。土地が低く水田の多かった星宮町には、水田がうめたてられたあとの空地が残っています。これらの畑や空地にも



静かな住宅の街(社宅)

町別人口表

	本星崎町	笠寺町	本城町	星宮町
昭45	2,739	4,216	1,207	384
50	2,469	3,832	1,181	1,129

（注）学校の南の星園町にはたった一か所だけ水田が見られます。（昭和53）

やがて家が建てられていくことでしょう。（注）

笠寺学区の人口は、五ページの表のように星宮町だけがめだって増えています。

(二) 商店の町

名鉄本笠寺駅から笠寺観音にかけてのあたりは、住宅の町とはずいぶんようすがちがいます。ビルもあり、いろいろな店が集まって商店街をつくっています。

笠寺観音と商店街

笠寺観音商店街

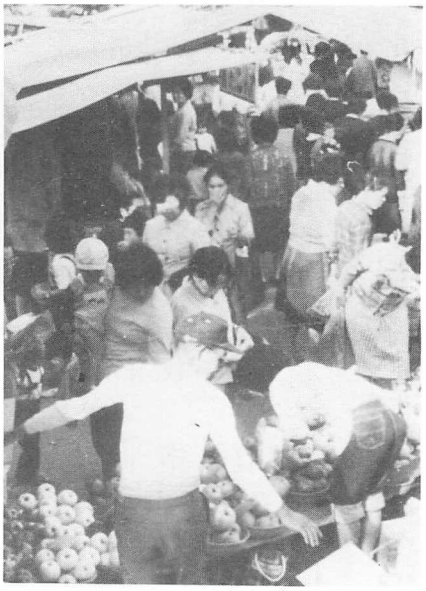
ネオンサインやかんばんの下のショーウィンドーに、いろいろな品物がかざられている店が多く見られます。くつや洋服など身の回りのものを売る店が多いのに気づくでしょう。野菜や魚を売る店はこの通りにはほとんどなく、通りの北がわの市場の中にあります。毎日新鮮な野菜や魚などを買いに大勢の人が集まってきます。市場の上はスーパーマーケットになっていて、衣料品を主としていろいろな品物がとりそろえてあります。

笠寺観音商店街年間主要行事

（昭和53年度）

月	行事内容
4月	総会　年間行事計画を相談して決める。
8月	盆踊　かざりつけをきれいにして夏祭りをする。
10月	名古屋祭協賛　市バスのフラワーカーを出す。
12月	年末大売出し　商店街・市場・スーパーマーケットが共同で行う。
1月	新年宴会
2月	商業感謝祭　全市参加行事

六の市と商店街



六の市

名鉄の踏切から前浜通までの間の旧東海道は、日曜日になると車の通行が止められ、交通事故を心配することなく買い物ができるので、人出もいちだんと増えます。

このあたりがにぎわうのは日曜日だけではありません。毎月六・十六・二十六日には、笠寺観音の境内に露店が出て、六の市が開かれ、大勢の人でごったがえします。名鉄や市野菜を売る店、駄菓子を売る店・洋服を売る店・そのほかいろいろな店が出て、お祭りのようなにぎわいです。

商店街の店の種類

店の種類	数
飲食店	24
衣料品店	5
物品販売店	21
その他の店	20

商店街に来る人（昭和53）

バスに乗って遠くから来る人もいるのです。

笠寺観音商店街へ買い物に来る人の半分ぐらいはよその学区から来る人です。市場の前にはいつも自転車がならんでいます。近くに駐車場も何か所かあり、自動車でいっぱいです。名鉄や市バスで来る人も少なくありません。このあたりは南区の中心に近く、保健所や区役所などもあり、交通の

笠寺観音商店街へ行く人（昭和53）

便利もよいところなのです。

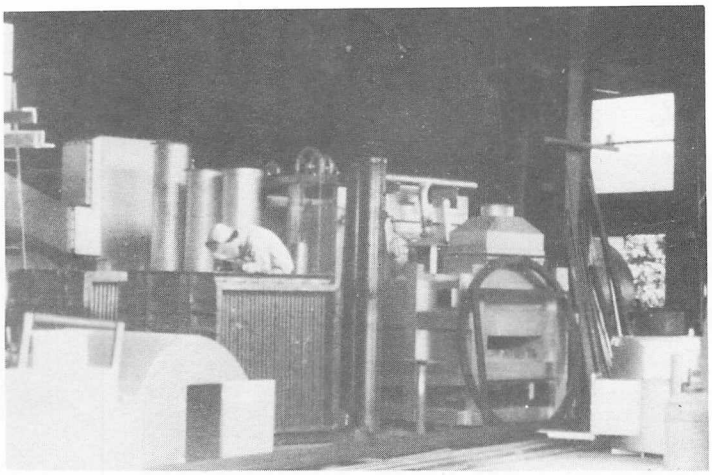
笠寺学区には、このほか大磯学区から続いている大磯通、銀座通（松池町、松城町のあたり）、区役所の近くの柵下町、鳥山町の道路ぞいなどにも商店がかたまっています。

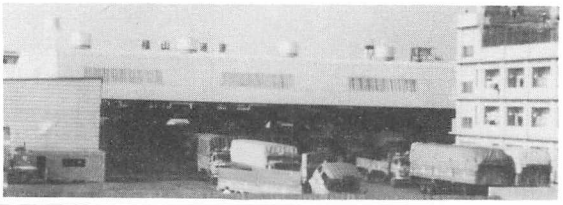
㈢ 工場の町

学区の西のはしには、東海道本線と新幹線が走っています。その東には、国道一号と高速道路が通っています。この鉄道線路と道路の間には、工場や倉庫が多く、道路にそってガソリンスタンドもならんでいます。

工場といってもそんなに大きなものはなく、自動車や機械の部品を作る工場が多いようです。モーターの回る音、鉄と鉄とがぶつかりあう音などがよく聞こえます。火花が散り、やけた油のにおいがするところもあります。

このほか本城町あたりの弦月宝生線の近くにも小さな工場があります。




トラックターミナル

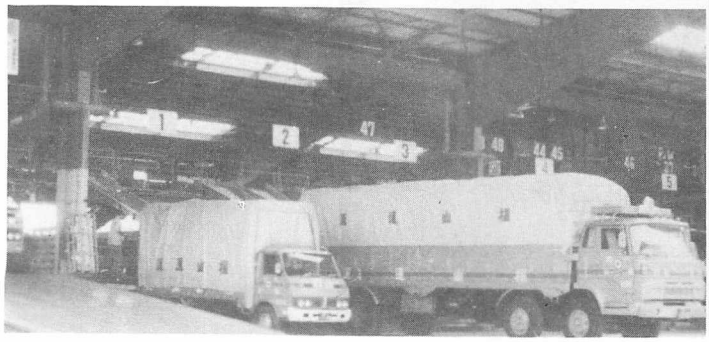
南区には、学校よりも広い、大きな工場がたくさんありますが、それは東海道本線よりも西側の港に近い方に集まっています。国鉄笠寺駅からそれらの大工場へ臨海鉄道がのびています。

笠寺駅の東に、大きな屋根のついた建物があります。これはトラックターミナル（昭和五十二年三月営業開始）です。近くには、国道一号や市道名古屋環状線（前浜通）などの道路があり、どこへ行くにも便利な所なので、鉄道でいえば駅にあたるターミナルがつくられたのです。小型トラックで集めた貨物をまとめて遠くへ行く大型トラックに積みかえたり、遠くから運ばれてきた貨物を小型トラックに積みかえたりする仕事をしています。貨物のほとんどは工場や商店からたのまれたものばかりです。

このようなしせつは、近くの道全町にもあります。

㈣　ほかの地いきとのつながり

わたしたちが、中区の栄へ買い物や遊びに行こうとするときには、国道や丹八山から市バスに乗ります。遠くへ旅行するときは名鉄や



学区の位置

主な道路

国鉄を利用します。また、自家用車に乗れば道路を走ってどこへでも行くことができます。

下の表からもわかるように、学区に住む人たちは、よその区へも働きに出かけます。市の中心部にある会社や役所で働く人もあれば、瑞穂区や港区などの工場で働く人もあります。これらの人人はバスや電車や自動車を利用して、住む家と働く場所の間を行き来しています。

ほかの地域との行き来は、人ばかりではありません。野菜・魚などの食品をはじめ、いろいろな品物が運ばれてきます。また、学区の工場で作られたものも運び出されます。そんなときにも、やはり道路や鉄道がだいじな働きをしています。

わたしたちの学区のある南区は、市の南の方にあたり、緑・天白・瑞穂・熱田・港区と東海市に囲まれています。

南区の中心は、国鉄東海道本線と市道環状線（前浜通）の交わるあたりです。中心地近くで、しかも交通の便利な国道一号や環状線ぞいに、くらしをよくするみんなのため

区別勤務先調べ

南	港	瑞穂	熱田	中村	守山	中	緑	その他	市外
47	8	8	6	9	6	5	2	6	18

乗物利用調べ

歩きか自転車	乗用車	名　鉄	国　鉄	バ　ス	その他
23	72	14	1	3	2

昭和53年7月現在 抽出115世帯調べ

南区役所

のしせつがかたまっています。ですから南区役所・南警察署・南保健所・南郵便局などが学区にあるのです。

学区の中を、よその学区やよその区へ通じている道路が何本か走っています。国道一号や市道環状線は広い地域を結ぶだいじな道路です。市バスや大型トラックも走っています。大きな自動車でもならんで走ることのできる広い道路ですが、こんざつがひどくなったので、国道一号の上には高速道路がつくられることになりました。

大磯通にも市バスが走っていますが、大型トラックのすがたは見られません。道はばがせまいうえ、道路にそって商店が建ちならび、買物客が多いので、大型車の通行は止められているからです。小型自動車とならんで、買い物かごをつけた自転車が走っているのが目につきます。

このほか主な道路として、旧東海道・銀座通・市道弦月宝生線・星崎鳴海線などが

南警察署

律令時代の東海道

㊟鳴海潟とよばれ、ひき潮になると、陸地があらわれた。

鎌倉街道

江戸時代の東海道

東海道本線

国道一号

名四国道
市高速道路

あります。

東海道の生いたちと移り変わり

昔、奈良や京都の都から、太平洋ぞいに東の地方へ行く道を東海道とよんでいました。今のようにしっかりした道路があったわけではありません。地方へ下る役人や、税（米や特産物）をおさめに都へ上る地方の人たちが、むらからむらへ通りやすい所を選んで旅を続けました。笠寺と鳴海の間は㊟遠浅の海でしたから、ここを通るには潮のひいているときをみはからって急いでわたらなければならなかったようです。

鎌倉に幕府が開かれると、京の都と鎌倉の間の行き来はいっそうはげしくなり、通り道が馬や人の足でふみかためられていきました。そのころになると、台地の上に新しい道も開かれてきました。鎌倉街道とよばれる道が今もところどころに残っています。とちゅう笠寺観音へたちよった人もいたことでしょう。

江戸に幕府が開かれると、江戸（今の東京）を中心に道路が整備されました。中でも江戸から都（京都）へ通じる東海道はだいじな道です。五十三の宿場がきめられ、めじるしの一里塚がつくられました。笠寺の東の海は大部分陸になっていましたので、笠寺観音から鳴海の宿にかけて新しい道がつくられました。天白川には橋もかけられました。学区に残る旧東海道や下新町の一里塚はそのときにできたものです。大名行列をはじめ、馬やかごやたくさんの人々が行き来するようになりました。笠寺観音から下新町の一里塚にかけて茶店や物を売る店が建ち並ぶようになりました。

明治時代になり、東海道本線が敷かれると、遠くへの旅や貨物の輸送は鉄道が受けもつようになります。しかし、わりに近い町や村との間の行き来には乗合馬車や荷馬車、あるいは人力車や大八車が使われましたので旧東海道はやはりだいじな道路でした。やがて乗合馬車がバスに、荷馬車がトラックにかわってきます。

旧東海道は道はばがせまく曲がりくねっていて不便なので、新道がつくられることになりました。学校の西は、昔は海であり、その後塩田になり、水田にかわってきたところです。そこに新道がつくられました(昭和十四年)。新大慶橋が天白川にかけられ（昭和十九年)、じゃり道がほそうされ、国道一号として旧東海道にかわって東京大阪間を結ぶだいじな道となりました。遠くへ行く自動車もふえてきました。国道ぞいにガソリンスタンドが並び、駐車場付きの食堂も目につくようになってきました。

自動車が大きくなり、たくさん走るようになると、国道一号だけではたりなくなって、もっと海岸よりに名四国道（国道二十三号）がつくられ、鎌倉街道よりもずっと山よりに東名高速道路がつくられました。さらに国道一号の上には名古屋市高速道路がつくられる

ようになりました。遠くへ行く自動車は国道一号をさけて、信号の少ないそれらの道路へまわるようになってきました。

学校のすぐ東側を走っているのが名鉄電車です。学区には本笠寺本星崎の二つの駅があります。岐阜・犬山方面行きの電車に乗れば金山や名古屋駅など、市の中心部へ行くことができます。また、豊橋方面行きの電車に乗れば鳴海や岡崎へ行くことができます。

本笠寺や本星崎駅がこんざつするのは、朝夕の決まった時間です。ほかの地域へ勤めに行く人や、ほかの地域から勤めに来る人も乗り降りするからです。本笠寺駅では、六の日や正月、節分の日などに笠寺観音へお参りに来る人で一日中こんざつすることもあります。

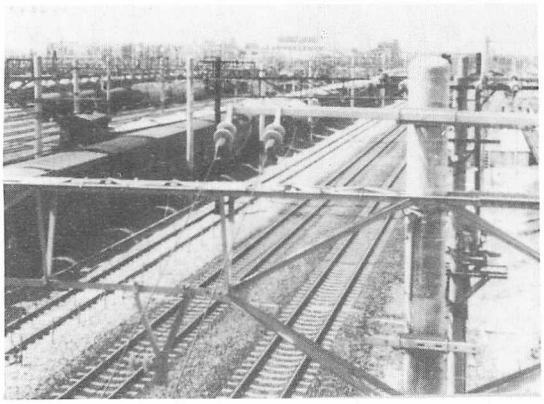
学区の西のはしを走る東海道本線の駅として笠寺駅があります。朝夕は勤めに行く人や勤めに来る人のすがたが目につきます。笠寺駅は、新幹線はもとより、急行も止まりませんので、東京や大阪へ行くにはほかの乗り物

名鉄本星崎駅

名鉄の本数

	本星崎	本笠寺
名古屋方面	普66本	66本 準急25
豊橋方面	普65	65 準急28

（昭和53）



国鉄笠寺駅

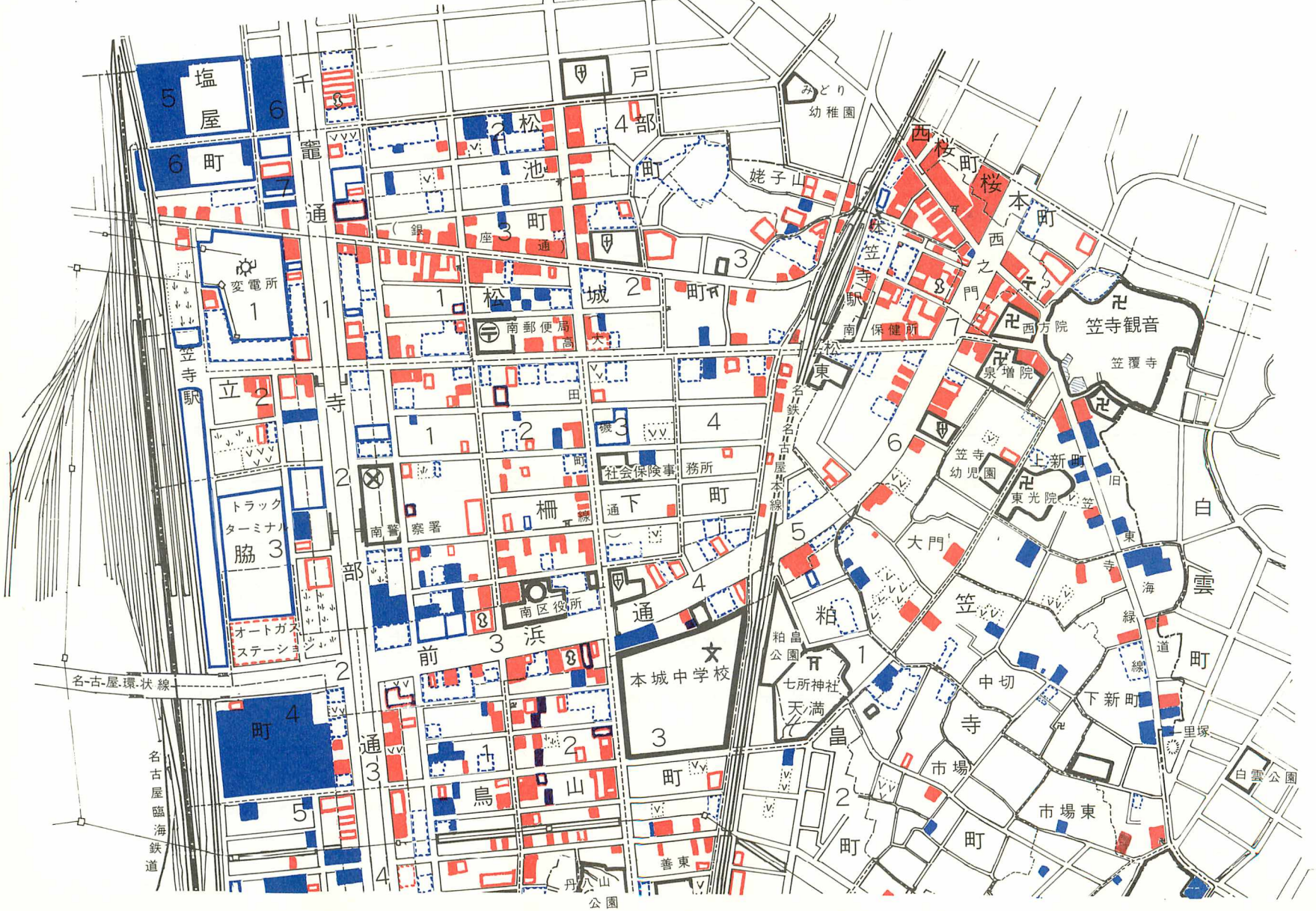
名鉄の一日の利用状況

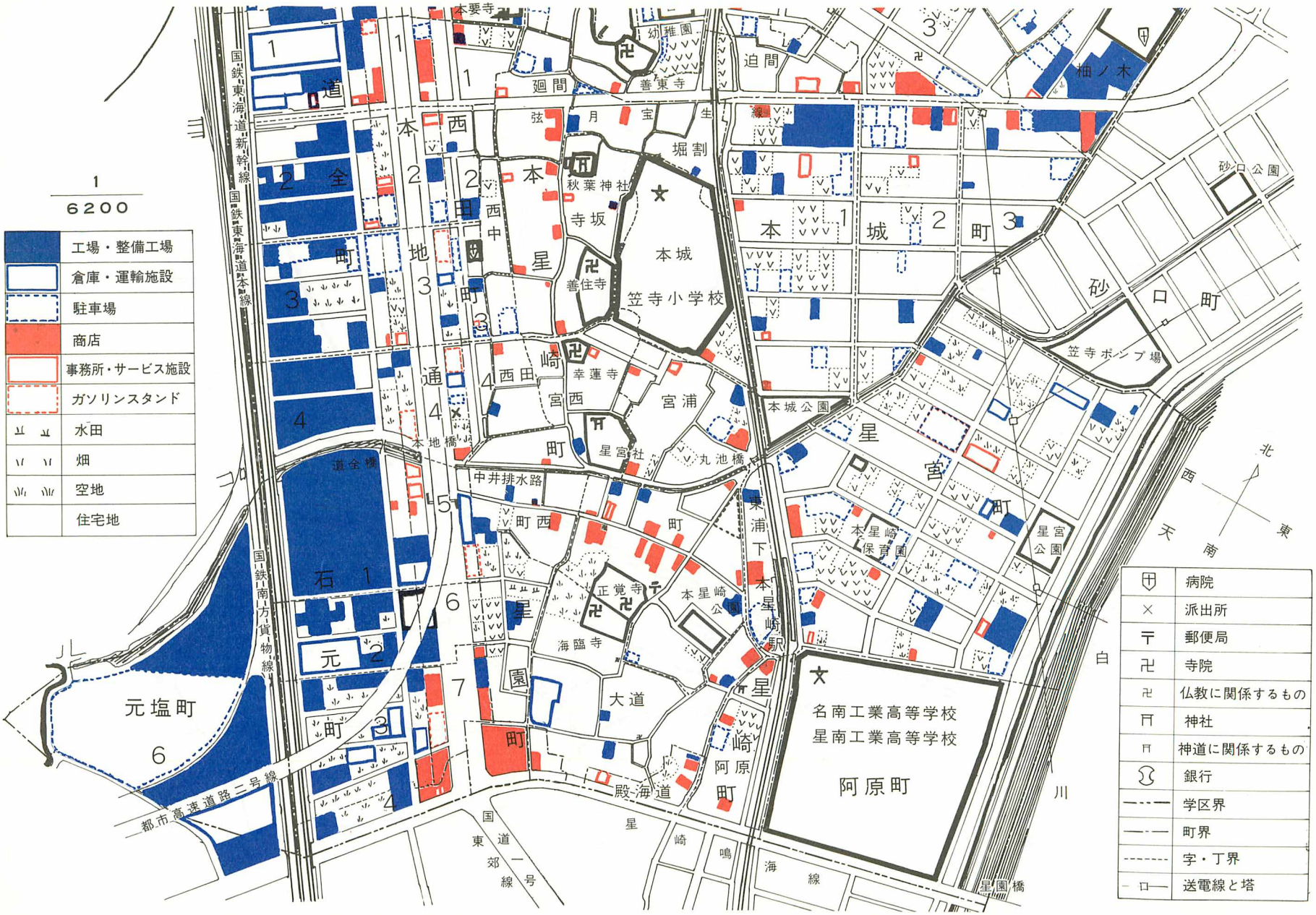
昭和	本星崎	本笠寺
23年	1,639人	4,642人
32年	2,536	8,270
52年	4,717	12,907

を使って名古屋駅まで出て乗った方が便利です。でも、駅には何本もの線路があって、たくさんの貨車が止まっています。それは、名古屋臨海鉄道が東海道本線につながる場所になっていることや、近くに国道一号・名古屋環状線などだいじな道路があることから、笠寺駅が貨物の駅としてだいじな働きをしているためです。特に自動車の積みおろし駅として有名です。

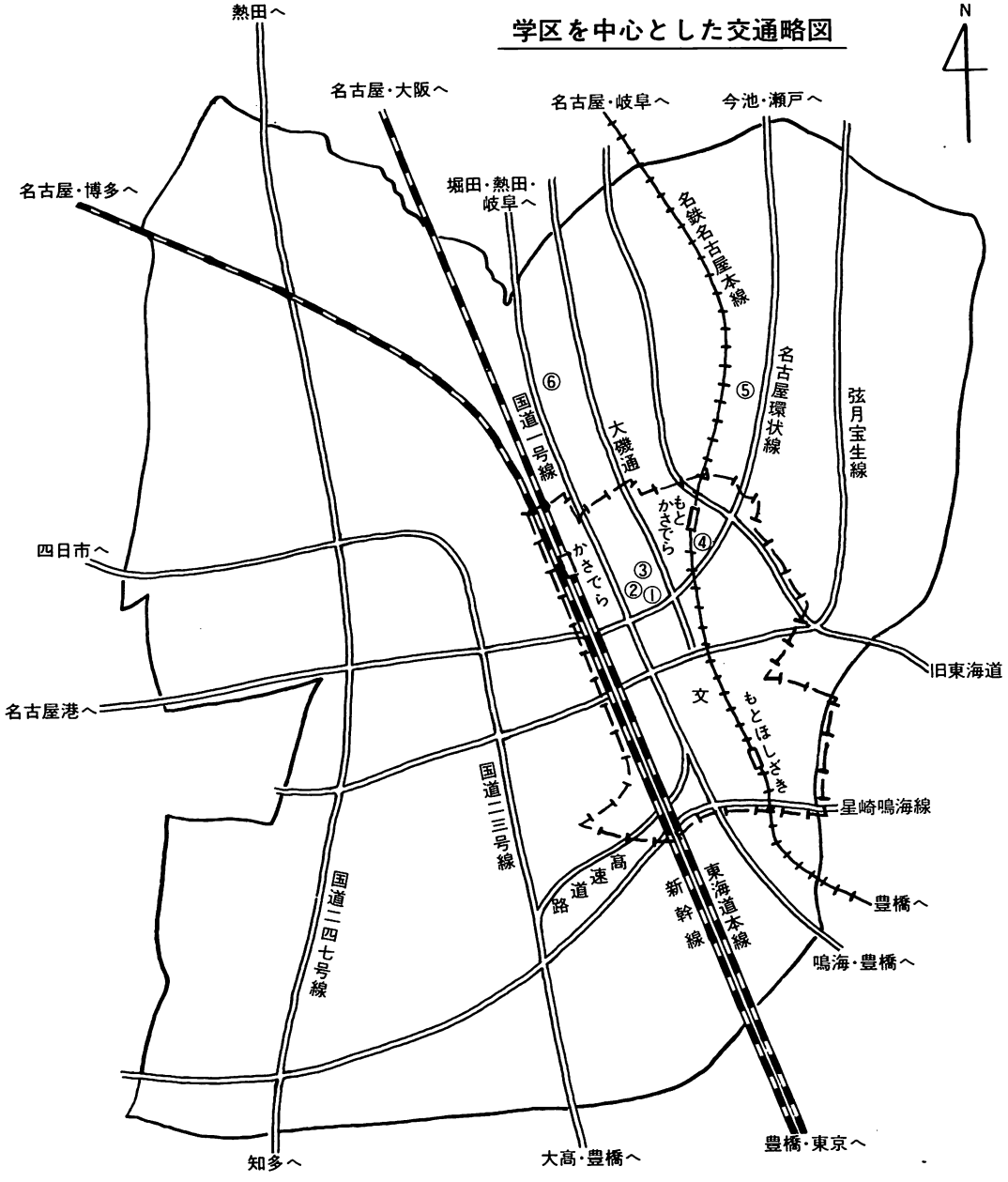
このあたりに、はじめて鉄道がしかれたのは明治十九年のことです。石炭をたいて走る汽車が、武豊と清洲の間をのんびり走りました。やがて、線路はしだいに延長されて東京や神戸までつながりましたが、笠寺駅はなく、大高か熱田の駅まで出なければ乗ることができませんでした。第二次世界大戦のころ、戦争に使う品物を作る工場がこのあたりにたくさんあったので、荷物の積みおろしや工場で働く人たちの乗り降りの便をはかって笠寺駅がつくられました。昭和二十八年に東海道本線が電化されると、電車や電気機関車が走るようになりました。昭和三十九年には、東海道本線とならんで新幹線も走るようになり、東海道本線の方は遠くへ行く電車の数が少なくなりました。

学区土地利用図


塩屋町
千鳥通
戸部
松池町
姥子山
みどり幼稚園
西桜町
桜本町
西之門
笠寺駅
南保健所
西方院
笠寺観音
笠覆寺
泉増院
松城町
南郵便局
変電所
笠寺駅
立寺
田
名鉄名古屋本線
上新町
笠寺幼児園
東光院
旧笠寺東海道
白雲町
社会保険事務所
柵下通
南警察署
トラックターミナル
脇
オートガスステーション
南区役所
浜前通
本城中学校
粕畠公園
七所神社
天満宮
大門
笠寺
中切
下新町
里塚
白雲公園
市場
市場東
名古屋環状線
名古屋臨海鉄道
鳥山
善東
丹八山公園


1
6200
工場・整備工場
倉庫・運輸施設
駐車場
商店
事務所・サービス施設
ガソリンスタンド
水田
畑
空地
住宅地
病院
派出所
郵便局
寺院
仏教に関係するもの
神社
神道に関係するもの
銀行
学区界
町界
字・丁界
送電線と塔
国鉄東海道新幹線
国鉄東海道本線
国鉄南方貨物線
都市高速道路二号線
国道一号線
東郊線
殿海道
星崎鳴海線
本要寺
幼稚園
善東寺
迫間
柚ノ木
砂口公園
秋葉神社
寺坂
善住寺
本城
笠寺小学校
本城公園
笠寺ポンプ場
砂口町
本城町
幸蓮寺
宮浦
星宮社
丸池橋
本地橋
中井排水路
道金橋
正覚寺
海臨寺
本星崎公園
本星崎保育園
星宮公園
星宮町
東浦下
本星崎駅
名南工業高等学校
星南工業高等学校
阿原町
阿原町
元塩町
星園橋
白川
北
西
東
南

学区を中心とした交通略図



名古屋市区別略図

①南区役所
②南警察署
③南郵便局
④南保健所
⑤南消防署
⑥南図書館

学区境

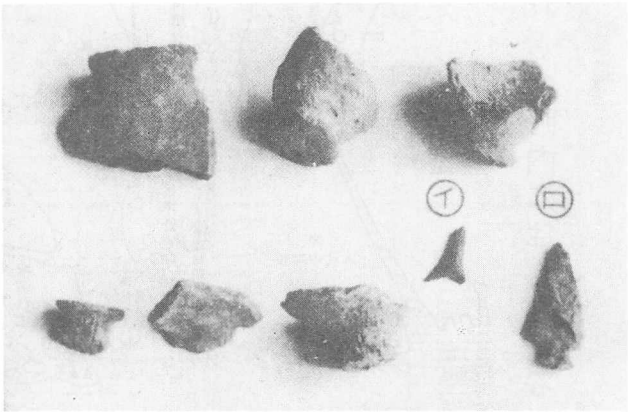
第二部　わたしたちのまちのうつりかわり

一、むかしのようすを伝えるもの

㈠　古い遺跡

粕畑貝塚

尾張地方でいちばん古い貝塚で、約六、七千年前に人がくらしたあとです。貝塚からは、ハイガイ・カキ・ハマグリなどの貝がらをはじめ、石器や土器・シカやイノシシの骨などが出てきました。石器の中には、かたい石をたたきわってつくったヤジリやサジもあり、土器は縄文式で、底のとがっているものが多いようです。



粕畑貝塚の出土品（野村晃義氏蔵）

市場・下新町遺跡

二つの遺跡は、発掘された時期はちがいますが、ほとんど同じ時代のもので、今からおよそ二千年前の生活のあとです。この遺跡は粕畑貝塚とはちがって長い間人が住んでいたらしく、石器や土器の種類も豊富です。土器は古い縄文式のものから、それよりもうすくてじょうぶな弥生式の土器や、大陸から伝わってきた方法で焼かれた須恵器など

人面土器

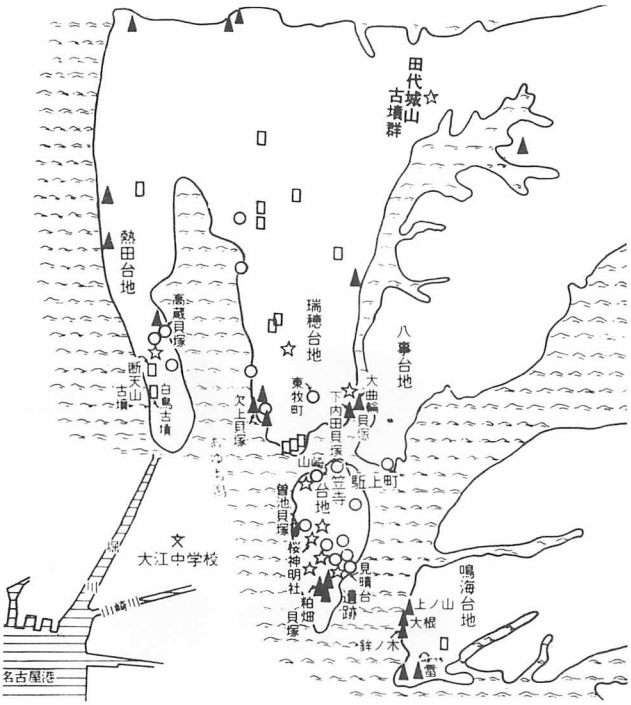
も出ています。穀物の貯蔵用らしい壺や鉢、お供え用か食事の時に使ったと思われる高い脚のついた皿などもあります。

市場遺跡からほり出された人面土器は、とっくりを人の形に見たてて口の部分に目や耳をつけたもので、めずらしい土器として有名です。

下新町遺跡からは、クルミもみつかりました。

このほかの遺跡

学区には、このほかに、本城町遺跡・本城町低地遺跡・粕畠町遺跡・粕畠三丁目遺跡などたくさんの遺跡があります。これは発掘した人がそれぞれ名づけたからで、もし笠寺台地全体を調べることができれば、もっといろいろなことがはっきりするでしょう。そして、これらの町内に住んでいる人たちは、遺跡の上でくらしているといってもいいのです。



南区遺跡分布図

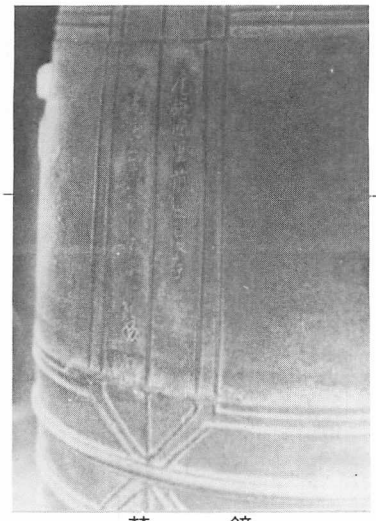
笠寺観音＝笠覆寺

この寺は、初め粕畑にあり、平安時代に藤原兼平という人の手で今の場所に移されたと伝えられています。

梵鐘にきざまれた文字や、笠覆寺に残っている古い記録によると、今から約七百四十年前の一二三八年（鎌倉時代の前期）に、阿願という僧によって、本堂や十二の僧坊・鐘楼などが建てられています。現在の本堂は、およそ二百年前の一七六三年につくられたものです。

境内にあるおもな文化財

（※註　色紙墨書妙法蓮華経は重要文化財　他は県文化財）



鐘　梵

梵　鐘　「尾張国星前笠覆寺　建長三年辛亥五月二十三日　阿願」の文字がきざまれている。

木造十一面観世音菩薩立像　笠寺観音の本尊で、高さ一・五メートル、笠をかぶっている。秘仏になっていて八年めごとに公開される。

色紙墨書妙法蓮華経　美しい書体で書かれたお経の巻物で、平安時代中ごろのものといわれている。

銅造十一面観世音菩薩立像　別名「ほり出し観音」とよばれ、一八一四年に西門を建

笠寺観音の本尊（中部読売提供）

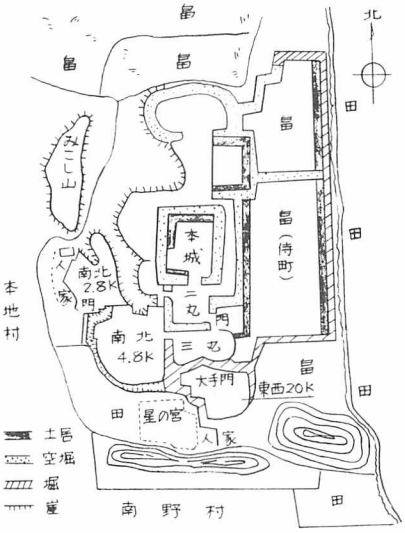
てるときに松の切りかぶの下から出てきた高さ五センチほどの仏像。鎌倉時代の作といわれる。

このほか、ほり出し観音といっしょに出てきた六稜式厨子（お経の入れ物）古雍四耳壺（室町時代のかめ）、江戸時代の俳人芭蕉の句をきざんだ春雨塚千鳥塚、キリシタン燈籠、山口道林の墓、宮本武蔵の碑などがある。

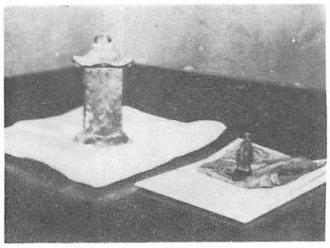
星崎城跡

笠寺小学校のあるこの場所は、今から四百年ほど前には星崎城があったところです。桶狭間の合戦のころ、このあたりには、市場、寺部戸部などの、とりで程度の小さな城がいくつもあり、織田方につくものと今川方に従うものに分かれて戦いにまきこまれたのです。

義元をやぶった信長は、岡田直教とその子直孝に星崎城を築かせ、天白川に阿原堤をつくって洪水を防ぐとともに、塩浜を広げました。信長の死んだあとも、直孝は、信長の子信雄の三家老のひとりとして重く用いられますが、ひそかに秀吉に通じたとい



星崎城古図



ほり出し観音

う疑いをかけられて、信雄に殺されてしまいます。

ついで、山口重勝・重政父子が城主になり、城をつくるときに移した星宮社を建てたりしますが、わずか四年いただけで伊勢に移り、廃城になってしまいました。

図面を見てもわかるように、かなり大きな城ですが、ほんとうにここにさむらいたちがいたのは二十年間ぐらいのことで、江戸時代の中ごろには、全部畑になってしまってあとかたもなかったようです。

一里塚

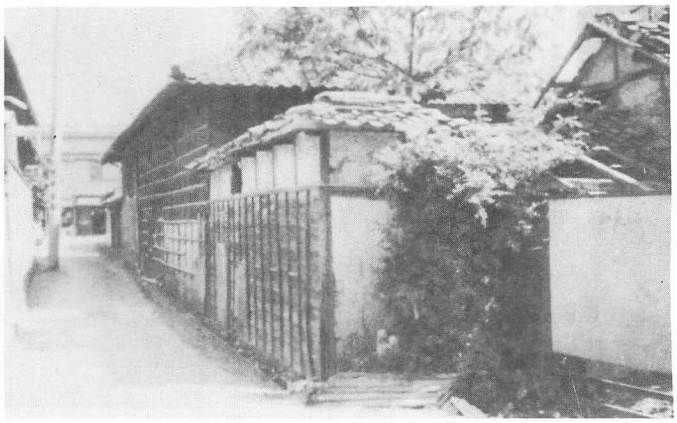
一六〇四年ごろ徳川家康によってつくられた、道のりを示す塚です。東海道の一里塚は、名古屋市内にほかにもありましたが、今はこの塚が一つ残っているだけです。かつては道をはさんで西側にもありましたが、大正十三年（一九二四）にはらい下げられ、宅地になってしまいました。

昭和初期の一里塚

塩がまと塩倉のあと

織田信長のころからさかんになった星崎の塩つくりのあとは、塩をやいたかまや、しまっておいた倉庫に残されていましたが、今では、道路や鉄道のしき地になったり、

家が建てかえられたりして、ほとんど見ることができなくなってしまいました。しかし、国道一号の東側にあったイソ堤の上に、塩やきに使った土の棒や板石がちらばっていたのを見たことがあるというおじいさんもいますし、星宮社の前のあたりからも、それらのものが出てきたそうです。やきあがった塩をしまっておくのが塩倉ですが、これも大道・西田・廻間・松城町にあったといわれています。下の写真の塩倉は、最後まで残っていたものです。



松城町にあった荒川家塩倉

(二) 伝説

笠寺観音と玉照姫

今からおよそ一二〇〇年前の奈良時代に、禅光というおぼうさんが呼続の浜に流れついた木で十一面観音をきざんで粕畑の地に祭りました。これを小松寺といい、今観音塚のたっている場所にありました。

しかし、平安時代の中ごろには、堂もこわれ十一面観音も雨ざらしになっていましたが、つみ草に来たひとりのむすめが自分の笠をぬいでかぶせてあげました。たまたま通

りかかった関白藤原基経の子兼平が、それを見て感心し、むすめは妻としてむかえられ玉照姫とよばれるようになります。そして、笠をかぶった観音様は、兼平によって現在の場所に移され、りっぱな寺が建てられて、笠覆寺とよばれるようになりました。

織田信宏と竹千代の人質交換

戦国時代には、尾張に織田氏、三河に松平氏、駿河（静岡）に今川氏がいて、たがいに勢力をのばす機会をうかがい、相手のむほんを防ぐために人質のやりとりも行われていました。

天文十八年（一五四九）には、この笠寺で、今川方の人質になっていた織田信宏（信長の兄）と、織田方に人質となっていた竹千代（徳川家康）の交換が行われました。そのとき、今川方では、三百余名の影武者を鳥居山（現在の丹八山）にかくして、万一の場合に備えました。交換が無事に終わったあと、鍬形かぶとの大将を先頭に笠寺観音にお参りをすませ、竹千代を連れて駿河に帰りました。

長命井戸……本星崎町宮浦五八四

昔、浄円という尼が、この土地に薬師如来を祭り、井戸の水を飲んで百三十六才まで生きていたというので長命井戸と名づけられました。

毎年元旦には、織田信長にこの水をさし上げていましたが、ある年、城まで運んでいって、ふたをとってみますと、桶はからになっていました。あなもあいていないのにへんなこともあるものだと、みんなさわぎましたが、はたして、その年（一五八二）の六月二日に本能寺の変が起こり、信長は、けらいの明智光秀に殺されてしまいました。

牛負いの庄助

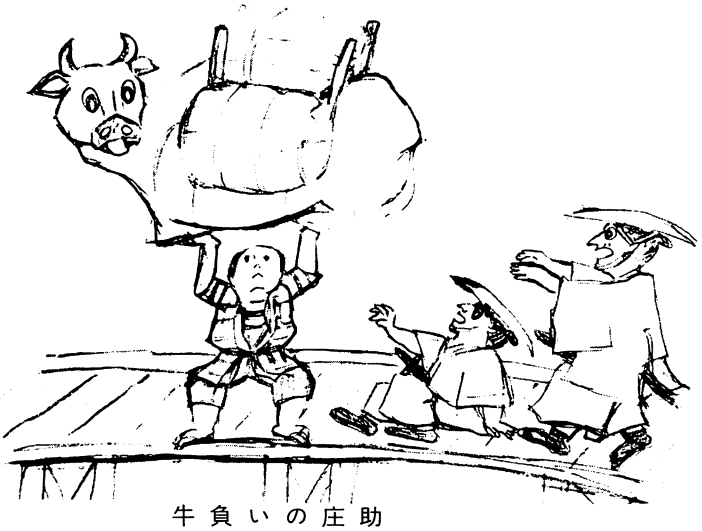
このあたり一帯に塩浜のあった昔のこと、庄助という、たいへん力の強い若者がいました。

ある日のこと、いつものように塩のたわらを牛の背につけて、塩付街道を歩いていきますと、ちょうど橋の上で、この地方を見回りに来られた殿様の一行とぶつかってしまいました。先頭のけらいが大声で、

「殿のお通りであるぞ。道をあけよ。」

とどなりますと、庄助はあわてるようすもなく、牛の四本の足をもって高々とかかげて橋の外へ出し、

「さあ、お通りください。」



牛負いの庄助

15　10　5

と言ったので、殿様もけらいもあっけにとられて、目をパチパチさせていました。

殿様はたいへん感心して、

「おまえの力にはおどろいた。その大力にめんじて、どんな願いでも聞きとどけてやろう。」

とおっしゃったので、庄助は、

「それでは、これから、塩一俵にかかる四文の税をなくしてください。」

と言いました。

殿様は、快くその願いをお許しになり、それからは、塩を運ぶときの通行税はなくなったということです。

㈢ むかしのお祭り

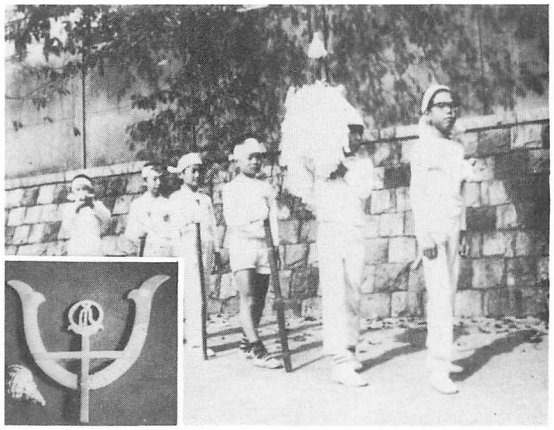
おじいさんが子どものころには、笠寺には、たくさんのお祭りがありました。そのどれもが、笠寺の歴史や、ここに生きてきた人たちの願いと結びついたものです。

新竹のドンドやき

新竹のドンドやきは、年のくれに使ったすすはらいやおかざりのウラジロなどを部落ごとに一か所に集めて燃やす、火の神秋葉神社のお祭りで、一月十三日の朝早くに行わ

れました。（地区によっては一月四日）

中心にササのついた大青竹を一本立てておき、火の手が上がると恵方の方角にたおしてこがし、それをかついで、「ドンドが始まったで、もちやきに行っとくりゃあなあ。」とふれながら秋葉神社にくりこみます。そこで、大青竹を三十センチほどの長さに切ってから細くわり、神にもそなえ、家々にも配りました。家々では、一本を屋根に上げ、一本はかまどにくべて、火の用心を祈ったものだそうです。

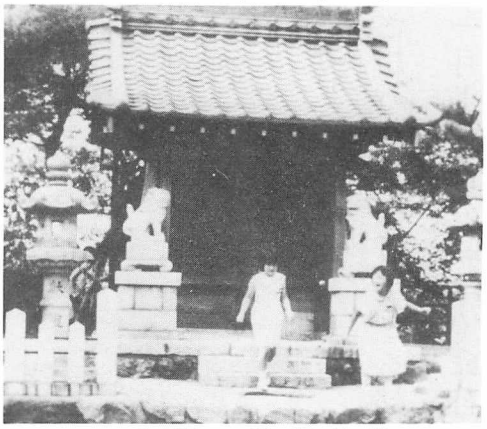


鍬形祭（昭和10年ごろのようすを再現）

鍬形祭

五月五日に行われた鍬形祭は、バレン（先のわれた一メートルほどの竹）を持った子どもたちが、鍬形をうばいあうという勇ましい祭りで、起こりは、桶狭間の合戦とも織田信宏と竹千代との人質交換とも伝えられています。

当日は、はちまき・たすき・わらじに身をかためた子どもたちが、ほら貝に合わせて、



廻間の秋葉神社

「ニーワーカーニ　ホンマニツイテ　チョーサンヨー　ハーサンヨー」
とかけ声をかけながら笠寺観音に向かいます。そして、まず本堂を三回かけめぐりますが、ほかの部落の行列とぶつかると鍬形のうばいあいとなり、バレンをふり回して戦いました。祭りがすむと、鍬形につけられたごへいは家々に配られ、豊作を祈って畑に立てられました。

うんか送り

土用の入の日のうんか送りは、イネの葉をくうウンカという羽虫を追いはらう行事で、子どもたちの手で行われました。

長い竹の先につけた人形（斎藤実盛）と鳥（鳳凰）をかかげて、
「ウンカの神送るわあ。実盛さっき行っとくれ。」
と唱えながら田の間の小道を回りました。実盛というのは、木曽義仲との戦いに敗れて死んだ平家の老将のことで、かくれているところを源氏方に教えた百姓をうらんで、
「ウンカになって田畑をくいあらすぞ。」
と言いのこしたという話にちなんだものと伝えられています。

また、となりの星崎学区の喚続神社に伝わるうんか送りは、長さ六メートルもある大

きな麦わらのたばに火をつけて走るという勇ましいもので、このあたりの人たちもみんな見物に出かけたものだそうです。

このほかにも、初観音（一月）、馬の橈（五月）、願祈送り（六月）、お十七夜（九月）、七所神社・星宮社の秋祭り（十月）、大みそかのおこもり（十二月）などの祭りがありましたが、ほとんどのものは昭和二十年ごろまでになくなってしまいました。

大道の山車

二、くらしのうつりかわり

㈠　大むかしから江戸時代まで

今からおよそ六千年前に、初めて笠寺台地に現れた人々は、粕畑の丘に住んで貝塚を残しました。そのころ、笠寺台地の周りは、すぐ近くまで海になっていて、学校から笠寺観音に続く高いところは、細長い半島になっていました。次のページの地図は、そのころの土地のようすを想像してかいたものですが、天白川は今のような川ではなく、

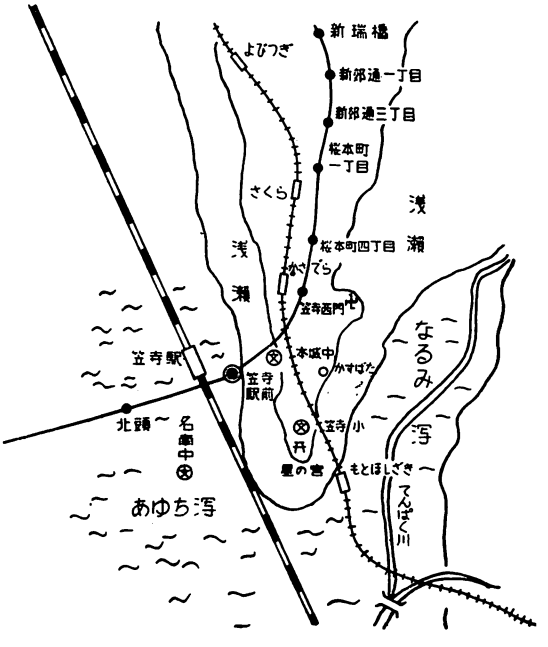
粕畑に初めて人が住む

ずっと、おくの方まで海になっていました。

細長い半島の東南の斜面に住みついた人々は、海のおだやかな日には、海岸に下りて、魚や貝をとりました。このころの人たちは、海にいるたくさんの貝を、今のご飯のように食べていたのです。

まだ鉄はなかったので、石や土で作った道具を使っていました。矢の先につける石のやじりや、けものの皮をはいだ石さじもみつかっています。林の中をにげ回るシカやイノシシを追って、今、学校の建っているこのあたりにも、しじゅう来たことでしょう。なべやちゃわんのような入れ物は、粘土を焼いて作りました。底のとがったつぼに木の実を入れて家の中につるしたり、いろりのはいにつき立てて、魚や肉をにたり、むしたりして食べました。

海を見おろす日あたりのいい丘に住みついた粕畑の人々も、あらしの日には、ほったて小屋に身をひそめて風のうなりにおびえていたでしょうし、雨が続いて何日も外へ出



6000年ほど前の地形想像図

市場・下新町に人が住みつく

られないときには、食べ物がなくて困ったこともあったにちがいありません。そして、やがて、もっとくらしよい場所をさがしてどこかへ移ってしまい、ここはまた、無人の半島になってしまいました。

粕畑の人たちがどこかへ行ってしまって三、四千年もたってから、再びこの台地に人が住むようになりました。市場や下新町から、その人たちのごみを捨てたあとがみつかっています。

この人たちも、初めは粕畑の人々とよく似たくらしをしていたようですが、鉄の道具や米を作ることを知ってからは、食べ物を求めて住まいを移す必要がなくなり、生活も安定してきました。下新町からほり出された土器の底に、モミのくっついたあとらしいものがみつかっていますが、わき水を利用して谷間のしめった土地でイネを作っていたと思われます。

大和朝廷との結びつき

そして、イネの作れる土地を求めて、しだいに村も分かれていったらしく、弥生時代後期（一八〇〇年ほど前）には、台地のそこここに村ができました。

村が増えるにつれて指導者も生まれ、力の強いものは弱いものを従えて、四世紀ごろには、日本の国は大和朝廷に統一されることになりますが、笠寺もやはりそのころ、

阿願が笠寺観音を建てる

星崎荘となる

朝廷と結びつきをもつようになりました。古事記という古い物語に出てくるヤマトタケルノミコトは、大和朝廷の命令で各地に出かけて戦った人ですが、そのミコトが東国に行くときに笠寺にたちよったという話や、ミコトのおきさきになったミヤズヒメは、この地方に勢力をもっていた豪族のむすめだという話も伝えられています。

大化改新が行われ、国のしくみが整ってからは、このあたりの人々も朝廷から与えられた土地を耕し、税を納めることになりました。ときには、朝廷の役人が見回りに来たこともあったらしく、市場からは、奈良時代の役人が帯かざりに使った四角の石がみつかっています。

奈良時代も終わりごろになると、大化改新のきまり（土地と人民はすべて朝廷のもの）はしだいにくずれ、力のある貴族や寺・豪族などがどんどん荘園を広げていきました。

平安時代の中ごろには、このあたりにも今の呼続から大慶橋の方まで広がる星崎荘という荘園ができていました。あれ地を耕して田畑をつくったわけですから、自然に人も家も増えてきたことでしょう。しかし、村の人は、あいかわらずたくさんの年貢や税を納めなければならず、生活は苦しかったようです。

阿願が笠寺観音の再建に手をつけたのは一二三八年（鎌倉時代の初期）のことですが、

鎌倉街道

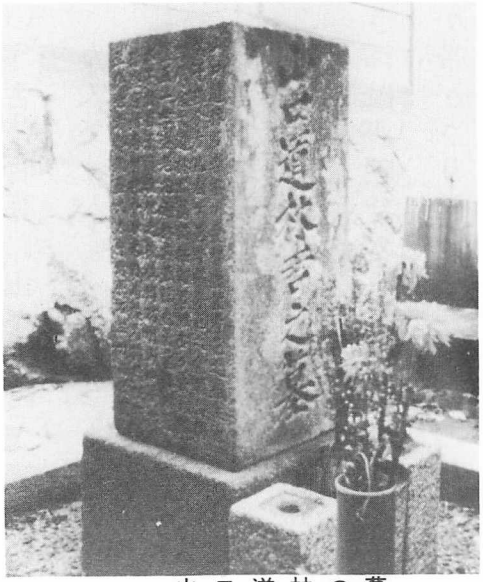
本堂のほかに十二の僧坊（付属の寺）をもつりっぱな寺がつくられたところをみると、すでにこのあたりにかなりの人が住み、村もできていたと思われます。また、台地のふちの小さな谷には、「はざま田」ができていました。

源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、鎌倉と京都を結ぶ道がしだいに整えられました。それを鎌倉街道といいます。その道はわたしたちの学区のすぐ近くを通って鳴海にぬけていましたが、鳴海潟は、ひき潮のときを見はからって野並のあたりをわたっていたようです。旅人の中には、ちょっと回り道をして笠寺観音にたちよった人もあったでしょうし、そういう人たちによって、京都や鎌倉のようすや、新しい農業のやり方なども伝えられたことでしょう。

市場・寺部・戸部に城ができる

室町時代も終わりに近づき、各地に力の強い大名が現れるころには、このあたりでも豪族たちがそれぞれに自分の土地に館をかまえ、やがて小さな城（市場城……粕畠町三丁目、寺部城……粕畠町一丁目、戸部城……戸部町二丁目）を築きました。

笠寺観音に山口道林の墓がありますが、道林は、



山口道林の墓

織田氏に仕えて戦いに参加し、わかくしてたおれた市場城の城主です。また、戸部町方面には、戸部新左衛門のおこじょろ（火の玉）が出るといういい伝えがありますが、新左衛門は、今川方についた戸部城主で、信長の計略にかかって殺された人です。

このように、笠寺は、東に今川氏、西に織田氏という二つの勢力がぶつかるところになっていたために、小さな城の主人たちは、どちらへついたら自分の一族が生きのびられるかとなやんだことでしょう。

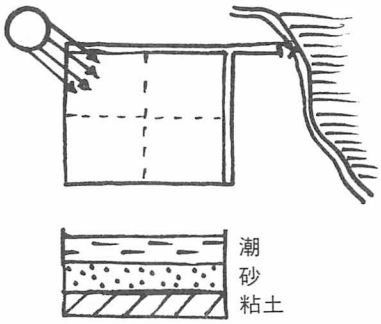
織田信長によって星崎城が築かれると、星崎は、急にこの地方一帯の中心地になり、人の行き来も多くなるとともに家も増えました。城の東側のさむらい屋敷には、城を守るさむらいたちも移ってきました。

信長は、現在の東海道線にそったあたりに広い塩浜をつくりました。工事には、およそ六万五千人（延べ人数）の人が働いたといわれていますから、よその地方から移ってきた人もあったでしょう。また、村人たちの中には、田畑の仕事をやめて塩つくりを始める人も出てきましたし、農業のあいまに塩浜に働きにいく人も出てきました。次のページの絵は、そのころの塩つくりのようすをかいたものですが、夏の暑い砂浜での、これらの仕事は、どんなにたいへんだったでしょう。

星崎城が築かれる

塩つくりがさかんになる

①



まず塩浜に潮をひき入れ、日にさらして蒸発させる。

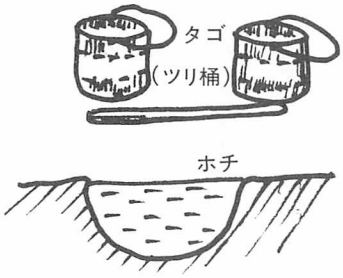
②

潮のたまった砂を馬牙で何度もかきあげてよくほしたうえでエブリでよせる。

③

その砂を家戸（あな）の上のコモの上につみ、上から潮をかけると、下にこい塩水がたまる。

④



ごはんつぶがうかび上がるほどのこい塩水がたまったら、タゴでかついでホチにためる。

⑤

ホチの塩水をだんだんかまどへくみ入れて、下からマツバやマキをもやして水を蒸発させる。

燃料のマツバやマキは知多郡から買い入れる。

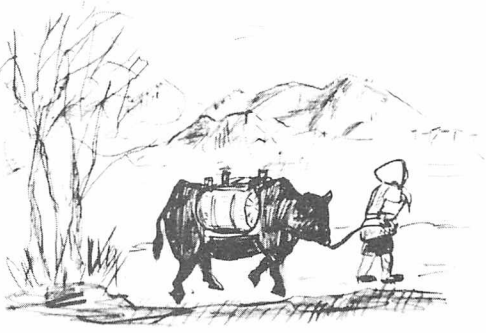
塩竈は、伊豆石をならべた上にどろと貝がら灰をこねあわせて焼いて作ってある。

竈は二十五日ほど使ってこわす。かまどの石は温石といって病気にきくといわれ、笠寺・戸部の名産として売られた。

できた塩は、牛につけたり人がせおったりして、尾張各地や遠く信州（長野県）までへも運んでいきました。おじいさんが子どものころには、国道一号の近くに塩田道という道が残っていたそうですし、この付近から始まって信州に通じる塩付街道は、塩を運ぶ道ということからつけられた名まえです。

星崎の塩は前浜塩とよばれて品質もよく、生産量も一時は尾張地方で使われる塩の大部分をまかなうほどでしたが、一六七〇年ごろになると、瀬戸内海方面でとれる塩が入ってくるようになって値段も下がり、だんだんおとろえていきました。また、十八世紀に入ると、台風や地震のために天白川がはんらんしたり塩田の堤がこわれたりして、塩のとれない年もありました。さらに、海よりに新田がつくられたために水落ちが悪くなり、塩のつくれなくなった塩田も出てきました。そして一八〇〇年ごろには、面積は五分の一に減り、江戸時代の終わりごろには、ついにそのすがたを消してしまいました。

一方、星崎城も、秀吉と家康がなかなおりしてからは城としての価値を失い、さむらいたちもよそに行ってしまって、ここはまた、もとの静かな村にかえりました。



塩を牛の背につんで

江戸時代の初めのころは、このあたりは、天白川ぞいに水田が開け、台地にも田畑がかなりできていましたが、木や草の生えたあれ地もたくさんありました。そして、川ぞいの田んぼは、たびたびの大水になやまされ、台地の田畑は、いつも日でりに苦しめられていました。村の人たちは、尾張藩の命令を受けて、ため池をつくったり用水を引いたりして田畑を広げることに努めました。

江戸時代の中ごろからは遠浅の海を干拓する工事が村の有力者や金持ちの商人などの手で行われるようになり、又兵衛新田・水袋新田・宝生新田・加福新田などができ、海はしだいに陸地に変えられていきました。

干拓をするときには、ふつう、まず海岸にたくさんのヨシを植えつけ、何年かそのままにしておきました。ヨシがしげるにつれて根もとに土がたまりますが、そこにソダ（木のえだのたば）や石で堤のわくを築き、中を赤土でかためて堤防をつくりました。堤防をしめきったあと、田のあぜや排水路をつくる仕事には、村

新田開発の図（数字は完成年）

江戸時代の村のようす

の人たちもやとわれて働いたことでしょう。

新田に必要な水は、八事や鳴海の方から引いてきました。今も残っている中江用水（中井排水路）は、こうしてつくられたのです。また、緑区の戸笠小学校のそばにある戸笠池は、戸部村と笠寺村に水を引くために設けられた池で、水は天白川の底をもぐって流され、笠寺台地の外側を回って新田に送られました。池や用水の修理や取り入れ口の木のとりかえなどは、村の人たちが力を合わせてやりました。

このようにしてつくられた新田も、なかなか塩分がぬけず、一七四九年に開発された又兵衛新田などは、でき上がってから二十年もたっても、まだわずかの年貢さえ納めることができなかったようです。また、新田は、もとからあった本田の数倍の面積があり、作物を作らないことは禁じられていましたから、村の人たちはたいへん苦労しました。

江戸時代には、迫間と廻間の間で分かれて、北が笠寺村、南が本地村になっていました。下の表を見ると、江戸時代の中ごろのおよそ百四十年間に、村の人口も牛馬の数もともに減っていることがわかります。新

江戸時代の人口・牛馬・塩浜

村 ＼ 年代	笠寺村			本地村		
	人口	牛馬	塩浜	人口	牛馬	塩浜
1670年ごろ	1854	38	約15町	1119	6	約23町
1810年ごろ	1371	5	約5町	1058	4	約5町

1670年（寛文村々覚書）　1810年（尾張徇行記）

田が増やされ続けたにもかかわらず、豊かな村にはならなかったことがわかります。

そのころは、とれ高の四割を年貢として納めるきまりになっていましたから、不作の年は、自分たちの食べ物にも困りました。また、広い新田がつくられたために、肥料にする草が足りなくなって本田までやせてしまったり、人手不足のために田畑があれてしまうこともありました。塩つくりの仕事がなくなったことも、村のおとろえる原因になったでしょう。そのため、生活に困った人の中には、熱田や名古屋城近くの町に移って、商人や職人になるものが出てきました。これも、人口の減るひとつの原因になったと考えられます。

東海道は、都である京都と幕府のある江戸を結ぶ道であり、西国の大名たちが参勤交代に利用する、そのころの日本でいちばんたいせつな道でした。東海道には、全部で五十三か所の宿場がつくられていました。この近くには熱田と鳴海に宿場があり、笠寺村も本地村も、鳴海の宿の助郷となっていました。助郷というのは、それぞれの宿場から次の宿場まで、人や荷物を運ぶ手伝いをするように義務づけられた村のことです。

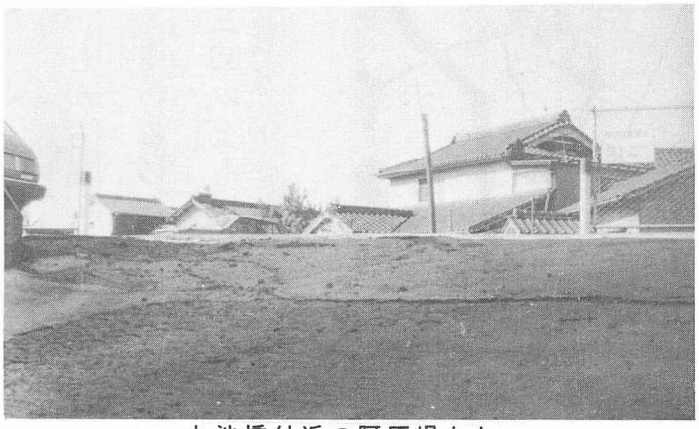
江戸時代には、大名たちは、一年おきに江戸と領地の間を行き来することになっていましたから、大名行列は、年に何回も通過しました。また、朝鮮からの使者や、将軍に

天白川に堤防を築く

さしあげる宇治の新茶のつぼなども通りましたので、そのたびに村の人たちは手伝いにかりだされました。田畑の仕事はおくれてしまいますし、手伝いでもらえるお金はわずかなものでしたから、どの村でも助郷にされることをいやがりましたが、藩の命令にそむくことはできず、みんなだまって重い荷物を運んだのです。

一五七五年に、織田信長は、川下の村や塩田を水害から守るために、天白川の西岸に阿原堤を築きました。これが今も残っている名鉄本星崎駅の横を通る道です。一六三二年には、尾張藩の手によって東海道と交わるあたりにも堤防が築かれ、天白橋もかけられました。それから後も、堤防は、川の流れにそってだんだん延長されました。

一七〇〇年代に入ると、大雨のために川があふれ、作物が全滅することもたびたび起こるようになりました。これを防ぐために、現在の新瑞橋の付近に用水をほって、天白川の水を山崎川に落としたこともあったようです。しかし、この方法もあまりうまくいかず、じきに、もとにもどされてしまい



丸池橋付近の阿原堤あと

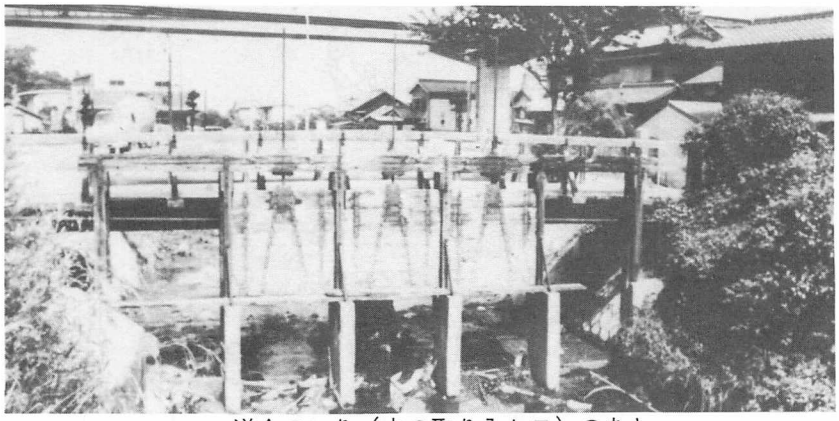
ました。

一七八〇年、尾張藩では、天白川の大改修を始め、直線で、しかも高い堤防を築きました。現在の堤防は、そのときにつくられたものがもとになっているのだそうです。しかし、その後も、一八五〇年、一九一二年、一九五五年と、三回以上も切れて、大水を起こしています。

(二) 明治になって

明治維新によって尾張藩がなくなり、明治五年(一八七二)に愛知県ができました。そして、十一年には、北部は前浜村に、南部は本星崎村となり、ついで、二十二年には、前浜村が笠寺村に改められるとともに、本星崎村と星崎村がまとまって星崎村になりました。さらに三十九年には、笠寺・星崎・鳴尾の三つの村が合併して愛知郡笠寺村が誕生したのです。村の広さは現在の南区の半分以上の大きなもので、今の笠寺小学校の南に役場もつくられました。

明治24年ごろの村のようす



道全のいり（水の取り入れ口）のあと

明治になっても水田での稲作がいちばんの仕事でした。水の苦労はあいかわらず続き、水不足になると上流の人たちとの間に水のうばいあいが起こることもありました。そんなときには、交代で水番に立ったり、日にちを決めて田に水を入れたりしました。

また、新田は、雨がふり続くと一面海のようになり、イネのなえがくさってしまうこともよくありました。そのたびに全部植えかえねばならず、本田とはちがった苦労がありました。化学肥料のない時代ですから、人々は、舟で沖泥や海草をとってきて、冬の間ほしてから田畑に入れました。また、イネを害虫から守るために、小学生が先生といっしょに、なわしろに行って、ニカメイガのたまごをとりました。

明治十四年ごろからは、綿作りもさかんに行われました。綿作りには肥料分の少ない土地が適しているので、台地の西の新田が一面の綿畑になった年もありました。とれた綿の実は、ヨシで編んだたなにならべてほしてから、仲買人に売ったり、自分の家で布に織ったりしました。しかし、外国から、綿花が輸入されるようになってからは、しだいに作られなくなり、大正に入ってほとんどすがたを消しました。

荷馬車

大八車

麦わらぼうし作り

東海道すじにあたる新町は、こうし戸の入った家のならぶ古い町です。ここは、笠寺観音の門前町として、また、熱田と鳴海の中間にある間の宿として、むかしから茶店などができていたところです。明治のころには、三げんの旅館をはじめ、ごふく屋、車かじ屋、げた屋、うどん屋、こんにゃく屋、ふろ屋などがあったそうです。

車かじというのは、木製の馬車や大八車についている鉄の輪がねを修理する職人のことです。トラックのなかった当時は、馬車屋とよばれる運送業者が、車を馬に引かせてワラやかわらを運んでいましたし、ふつうの農家でも大八車が使われていたためにこんな仕事があったのです。

明治の半ばごろからは、麦わらぼうし作りがさかんになり、一時はアメリカにも輸出されたりして村のくらしを豊かにしてくれました。

ぼうしは、ハダカムギのくきで編んだ麦稈真田という長いひもをぬい合わせて作りますが、ひもを編む仕事は家庭の内職として行われました。女手で男の人の賃金よりたく

新町の家なみ

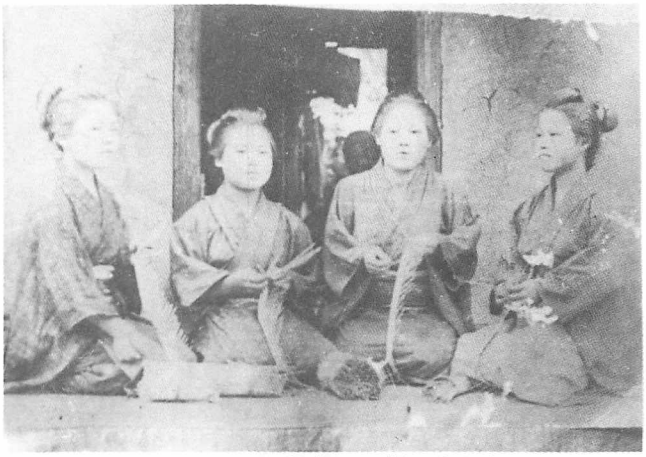
さんかせげるときもありましたから、多くの家で夜おそくまでやったそうです。新町にあったぼうし屋には、近所のわかい男の人たちが大勢働きに行きました。

しかし、大正十年ごろには、輸出もとだえ、また、熱田方面に工場ができるにつれてわかい人たちはそちらに移ってしまい、ぼうし作りの仕事もおとろえてしまいました。

明治十三年には、西門を中心にかわら作りが始まりました。粕畑からとれる質のよい粘土を原料としたもので、最もさかんだった大正の終わりごろには、全部で三十数けんもあったそうです。また、市場と本城に赤れんがの製造所もできました。

しかし、これらの工場は、どれも従業員がせいぜい十人ほどの小さいもので、昭和に入って粘土をとることができなくなると、いずれもすがたを消してしまいました。

一方、熱田方面には、明治二十年ごろから紡績・セメント・車輛・時計などの大きな工場もできてきました。村の人々も勤めに行くようになり、着物にげたをはいた人や、つめえりを着た人たちが一時間もかかる熱田の工場まで歩いて通ったものだそうです。



麦稈真田を編む人たち

川ざらえとかえどり

村の人たちの楽しみのひとつに伊勢船がありました。これは、船に乗って伊勢神宮にお参りに行くもので、八十八夜（五月の一日か二日）の夜なかに出発することに決まっていました。

石炭を運ぶ船が使われることが多く、船内はまっ黒によごれていました。また、エンジンのついてない帆船でしたから、風のぐあいが悪いと潮に流されるままになっていたり、とちゅうでひき返さなければならず、ふつう夜明けには伊勢に着くのに、何日もかかることもありました。また、海があれるとびしょぬれになって水をかい出しましたし、フカに追われて命がけでにげたこともあったそうです。

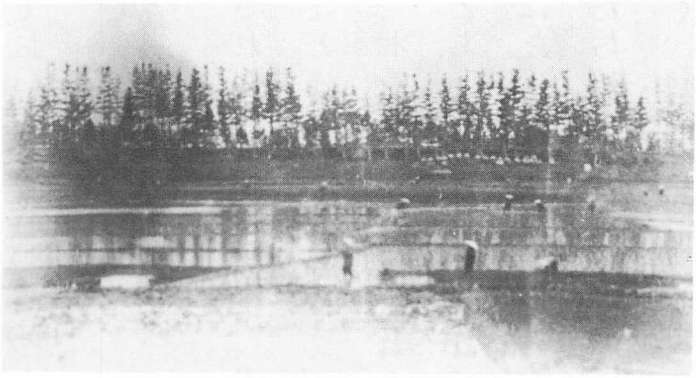
たんぼの間にはたくさんの用水が流れていましたが、その流れをよくするために、村じゅうの農家の人たちが出て川ざらえということをしました。おとなの人がジョウレンでどろをかき上げると、中にひそんでいたドジョウがうじゃうじゃ出てきていくらでもとれまし

かえどりをする村の人たち

た。また、秋になってたんぼに水がいらなくなると、かえどりといって小川の水をせき止めて水をかい出し、ドジョウやフナをいっぱいとりました。ため池の水がからになったときには、おとなも子どもも池に入って、大きなコイもつかまえたものだそうです。

今は学区外になってしまいましたが、中江用水が大江川に合流するところをみつばたといって、村の人たちにとってだいじな場所になっていました。大潮のときは海水が入ってきて、新田の堤が切れるのを防いでくれましたし、たいせつな排水路でもありました。また、昭和の初めまでは木材を積んだ船も出入りしていたそうですから、港としての役割りもはたしていたのでしょう。

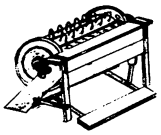
みつばたは、子どもたちにとっては楽しい遊び場でした。夏休みになるのを待ちかねて、大きい子も小さい子もそこに集まりました。潮止めの水門ができてからは、それをとびこみ台として、はだかんぼうの子どもたちが、どぼんどぼんととびこみました。潮が引くと川の中に曲がりくねった水路ができました。泳ぎをやめた子どもたちは貝をとり始めます。川岸の近くには



天白川堤の松並木と水田（明治20年ごろ）

名古屋市になる

①


②

農事組合

太い竹づつが見えていますが、これはおとなの人たちのしかけておいたもので、いつも何びきかのウナギが入っていたものだそうです。

㈢　大正の時代

大正十年（一九二一）に、わたしたちの村は名古屋市に編入され、学校の住所も、「名古屋市南区本星崎町字大道」となりました。今までの村というまとまりがなくなって、「学校区」がそれにかわるようになります。お別れの式のとき、村長さんは、「これからは百姓では食べていけないから商工でくらしていくように。」とあいさつをしたそうです。だまってそれを聞いていた人々の胸の中には、新しい生活にたいする不安と期待があったことでしょう。そのころから、学区北部の人口増加がめだち始めます。

名古屋市に入ってからも、このあたりは稲作中心の農家が多く、特に本星崎地区には、めだった変化はありませんでした。

しかし、十三年には、町内ごとに農事改良実行組合がつくられ、共同で種モミをとったり、肥料を買い入れたりするようになりました。また、仕事のひまなときには、農事試験場に視察に行ったり、研究会を開いたりして、新しい技術をとり入れることに努めました。イネのモミをとるにも、①千歯稲こき機にかわって、②足ぶみ回転式のものがどこ

電燈ともる

愛知電気鉄道開通

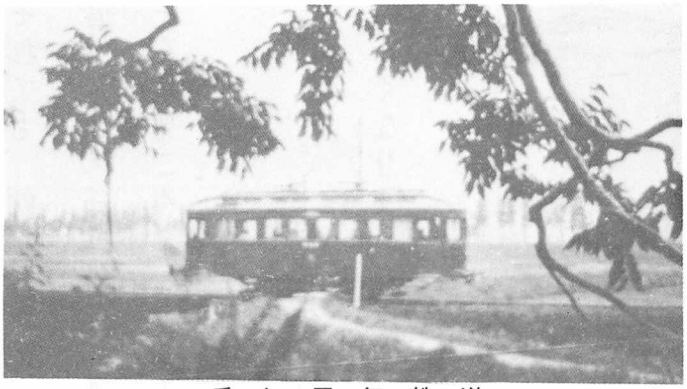
の家でも使われるようになりました。

明治四十三年（一九一〇）には、西門付近に電燈がつき、大正の中ごろには、大部分の地区に電柱が立てられました。初めのうちは、「夜は暗くてけっこう。」と言って申しこまない家もあったそうですが、まもなくどこの家でも引くようになりました。

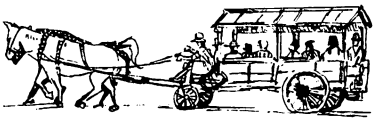
電燈は五ワットから十ワットの暗いもので、一けんに一燈だけでしたから、長いコードをつけて動かせるようにしておきました。しかし、石油ランプに比べるとずっと明るく、石油をつぎたす必要もありませんでしたから、生活はずいぶん便利になりました。

大正六年（一九一七）に熱田と有松の間を電車が走るようになり、本笠寺と本星崎にも駅ができました。これが今の名鉄電車ですが、そのころは愛知電気鉄道とよばれていました。

本笠寺まで開通した当日（大正六年三月七日）は、プラットホームに万国旗がかざられ、おとなも子どもも電車見物に集まりました。しかし、そのころは勤めに行く人が少ないうえに、熱田や鳴海へ買い物に行くにもあいかわらず歩きの人が多く、



愛知電気鉄道



乗合馬車

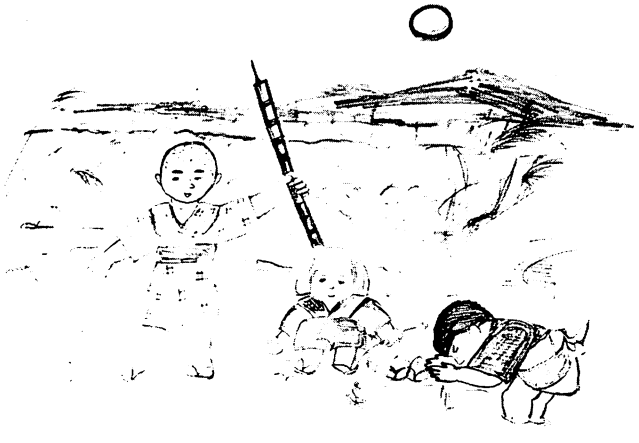
せっかく電車が止まってもだれも乗らないこともありました。それでも、朝夕は熱田の工場に通う人がふろしきを片手に乗り降りしましたし、大須観音や知立の三弘法にお参りに行くおじいさんやおばあさんが、なれない電車におそるおそる乗りこみました。また、富山から来た薬の行商人のすがたも見られました。

十二年には、岡崎まで延長され、東西への交通が開かれました。そして、熱田方面の工場が大きくなるにつれて勤めに行く人が増え、電車に乗る人も多くなりました。

一方、電車の開通によって人の流れはすっかり変わり、西門に商店が増えるとともに、新町は火が消えたようにさびれてしまいました。また、それまであった熱田から西門を通って豊明まで通う乗合馬車はなくなりました。

お月見の夜になると、子どもたちはみんな天白川に行きました。むかしから「お月見の夜、天白川の水で目をあらうと目の病気にかからない。」と言い伝えられていたためです。

川原に下りて目をあらうと、がき大将を先頭にだんご



お月見のだんごとり

区画整理

どんぐりうち

とりを始めます。よその家の縁側にそなえてあるだんごをこっそりもらって食べるのです。長いぼうの先に打ちつけたくぎにさしてつり上げる子もいました。そして、「あそこのだんごはさとうが入っているぞ。」などと言いながら地下じゅうを回り歩きました。

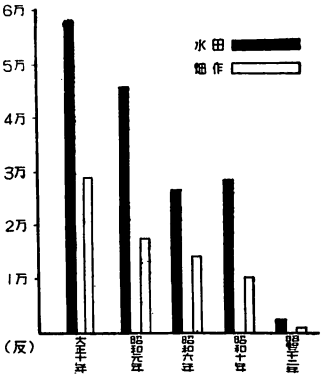
どんぐりうちというのは、ドングリ、ツバキの実、ギンナンなどを当てっこする、今のビー玉のような遊びです。

秋になると、お寺やお宮の森にたくさんの木の実が落ちます。子どもたちはそれを拾うと友だちをさそってどんぐりうちを始めます。線のむこうに置いてあるドングリに命中すれば自分のものになります。取ったドングリは着物のふところにしまいました。たくさん入れすぎると横からぽろぽろこぼれましたし、夜になって帯をほどくと、ころがり出ることもありました。

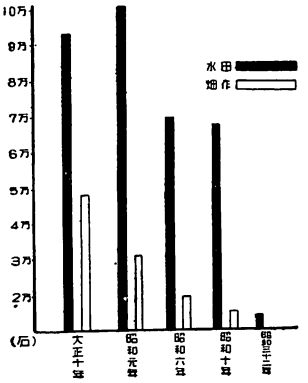
㈣　昭和に入って（昭和十二年ごろまで）

名古屋市では、大正の終わりごろから新しい町づくりの仕事にとりかかり、まっすぐで広い道をつくるとともに、町のくぎりも新しく決めました。これを区画整理といい、それによって、このあたりも、形のうえでは村から町に生まれ変わったのです。

笠寺西部で区画整理が始まったのは昭和に入ってすぐのことで、本城中学校のあたり



耕地面積の移り変わり（反別）



米の収穫高の移り変わり（数量）

にあった台地をけずって西のたんぼをうめたて、まっすぐな道路をつくりました。丹八山はそのとき残されたもので、かつては、あの高さの台地が西門まで続いていたのです。ダンプカーやショベルカーのない時代でしたからたいへんな大工事で、地元の人のほかに出かせぎの人たちも大勢とまりこんで働きました。鳥山、柵下、松池などはこうして生まれた町です。

学区南部の区画整理は昭和九年から始まりました。うめたての土は鳴海の山から持ってきましたが、大慶橋をわたる長いレールをしき、何台ものトロッコを連ねて運んだものだそうです。

区画整理のすんだ土地には、家や小さな工場がぽつぽつできてきました。また、整理のときに土地を地主に返してしまった人などは、農業をやめて勤めに出るようになり、大正の中ごろからはやりだした自転車に乗って、熱田方面の工場に通うすがたが目だち始めました。

十三間道路ができる

区画整理によって、国道一号や前浜通をはじめ、まっすぐな道路がたくさんでき、それまであった塩田道やおぎん坂（丹八山のあたりにあったやぶの間の坂道）はすがたを

消しました。

国道一号は、道はばが十三間（一間はおよそ一・八メートル）あったことから、十三間道路とよばれていましたが、できたばかりのころは通る人も少なく、道のまん中は草むらになっていました。国道になったのは、新しくかけられた大慶橋（昭和十九年）によって鳴海方面とつながってからのことです。

前浜通は、名古屋港方面に通じる道路としてつくられました。また、弦月宝生線は、千種区の弦月町と港に近い宝生町とを結ぶ道路ですが、宝生町から廻間までできたところで戦争のために工事が中断され、残りができ上がったのは昭和三十年になってからのことです。

昭和三年の十二月から、東海道に乗合自動車が走るようになりました。熱田の伝馬町と有松を結ぶもので、新町にも停留所ができました。赤い旗を出しておくと、停留所でない所でもちゃんと止まってくれる便利な自動車でした。

そのころの伝馬町は、このあたりでいちばんにぎやかな町で、正月用品やおぼんの買い物には熱田まで出かける人が多かったのです。六年には鶴舞公園行きが、八年には水主町行きの自動車も走るようになり、市の中心部への交通も便利になってきました。

しぼり

わらなわ

航空機の生産

また、複線化された愛電は、昭和二年には豊橋まで延長されました。そのころになると、なっぱ服とよばれる作業服の乗客がめだって多くなります。

麦わらぼうし作りがおとろえてまもなく、鳴海、有松方面からしぼりの仕事が入ってきて、女の人や子どもたちの内職としてさかんに行われました。そのころ子どもたちの間で目の病気がはやったのも、ひとつには暗いところで細かいしぼりの仕事をしすぎるせいだと言われたほどでした。

同じころ、イネのくきでわらなわを作ることも行われ、昭和九年には、本星崎に出荷組合もできました。足ぶみ式のなわない機を土間にすえて、男の人たちはせっせと夜なべ仕事をしたものです。

しかし、名古屋港方面の工場が大きくなるにつれて、そちらに働きに行く人が多くなり、しぼりもわらなわ作りもまもなくすたれてしまいました。

(五) 戦争のあらしの中で（昭和十三年～二十年）

大正の半ばから始まった名古屋港方面の航空機の生産は、中国やアメリカなどとの戦争が広がるにつれてさかんになり、工場はどんどん大きくなりました。そのために港近くの新田には航空機に関係のある小さな工場や働く人の寮などができてきましたし、わ

たしたちの町からも大勢働きに行くようになりました。

国鉄笠寺駅の西にあった航空機の車輪をつくる工場も、昭和十九年ごろには、従業員数一万五千人もの大工場になり、夕方の銀座通は、帰りを急ぐ人たちの自転車のヘッドライトのために、まるで火の川のようだったそうです。

また、戦争がはげしくなるにつれて、いろいろな品物が不足して自由に売り買いできなくなり、西門や新町の商店も夜は早く戸を閉めてしまうようになりました。店の主人のなかには、商売を家の人に任せて工場や軍隊に行く人もありました。また、働き手を失った農家では、残された女の人が男の代わりになって働き、小さい子どもたちまでが、いっしょうけんめい家の仕事を手伝いました。

昭和十八年十月には、それまで新瑞橋止まりだった市電が笠寺西門まで来るようになり、十九年には六号地まで延長されました。これは港方面に大勢の人を運ぶために軍隊まで出て夜を日についで完成させたものですが、朝夕にはいつも人があふれて西門の停留所では乗りこめないこともたびたびでした。

同じ十八年十月には国鉄笠寺駅もでき、作業服にゲートルをつけた男の人や、ひのまるのはちまきをしめたわかい女の人たちが、わらいを忘れたような顔で足ばやに出入り

するようになりました。また、十九年の終わりごろからは、いなかへ疎開（空襲をさけて避難すること）する人たちの、汽車を待つすがたが毎日のように見られました。女の人はだれもかれもモンペをはき、おかっぱ頭の女の子のせおうリュックまで重くふくらんでいました。

わたしたちの学区が初めてアメリカの飛行機におそわれたのは十九年十二月十八日の正午すぎのことで、東海地震（十二月七日）の後始末をしていた町の人々は恐怖におののきました。警報のサイレンが鳴り終わった直後、廻間地区に十数個の爆弾が落ち、かくれていた防空ごうもろともふきとばされ、一家全滅をふくめて十八名の人が死にました。校庭にも落ち、北校舎の窓ガラスは二階までめちゃめちゃにこわされました。

防空ごうでの生活

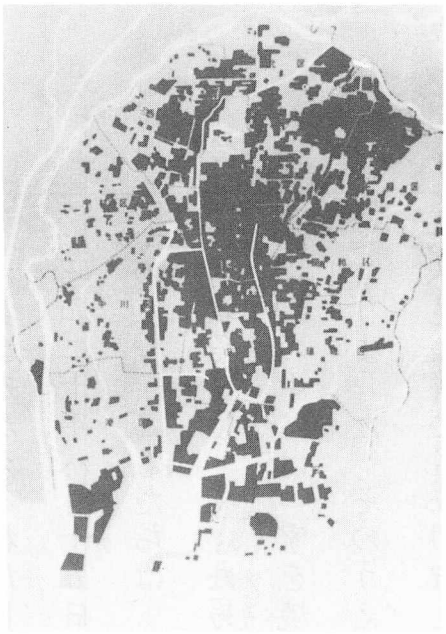
その年は雪が多く、一月に入ってからはかなり積もりました。そんな中で、空襲と余震（大きな地震の後続いて起きる地震）におびえる人々は、夜は防空ごうで寝たり、何度も外にとび出すなど、不安な生活を続けたのです。

三月に入ると空襲はいっそうはげしくなり、十二日の大空襲では、市の中心部は一面の焼け野原になってしまいました。

昭和二十年五月十七日

五月十七日の夜明け前、ついに、笠寺小学校付近に大量の焼い弾が落とされ、笠寺小学校、七所神社、星宮社、正覚寺をはじめ、田古屋、町地区などでたくさんの家が焼かれ死傷者を出しました。

人々は、燃え上がる家や学校を背に、ぶつだんのいはい一つを持って天白川の土手や鳴海の山ににげました。また、だまって田のあぜにすわりこんだまま朝をむかえた人たちもありました。それまで、町の人たちは、地区ごとに集まって、砂ぶくろやバケツで火を消す訓練をくり返してきましたが、百三十機もならんで飛んでくる飛行機からつぎつぎに落とされる焼い弾に手のほどこしようもなかったのです。



名古屋市戦災焼失区域図

名古屋港付近の工場もたくさん焼け、学区の人たちも何人か死にました。名古屋市全体では、この日だけで二万三千六百九十戸の家が焼かれ、国民学校（現在の小学校）も笠寺、呼続、豊田、道徳、白水をはじめ、全市で十六校が全焼しました。死者も五百十一人にのぼり、天白川のそばにあった火葬場には、かます（ワラのふくろ）に入った遺体が毎日のようにリヤカーで運ばれてきたということです。

(六) よみがえるわたしたちの町

昭和二十年八月十五日、苦しかった長い戦争が終わりました。いなかに疎開していた女の人や子どもたちは、満員の汽車や電車を乗りついで、ふるさと笠寺に帰ってきました。戦争に行っていた男の人たちも、やつれきったすがたで国鉄笠寺駅に降りたちました。町の中には、家を焼かれたために小屋に住んでいる人もあり、夜はしきりに停電も起こりました。そのうえ、大部分の工場が仕事を休んでいましたから、働く職場を失った人もたくさんありました。人々はせまい空地を耕してイモやムギを作りました。ガスも止まり、配給されるマキもとだえがちでしたから、鳴海の山までたきぎを取りに行ったこともあったそうです。

しかし、日本の国も名古屋の町も、そして、笠寺の人たちも、いつまでもうちのめされたままではいませんでした。まもなく、焼け残った工場を開いて食料品、建築材料、衣料品などの生産を始めました。そして、二十四年ごろからは臨海工業地帯も活気をとりもどし、学区の人々も再び勤めに出るようになりました。

また、学区外から転入してくる人も多くなり、鳥山、柵下、松池町方面には、木造のアパートがつぎつぎにできました。二十五年には、粕畑のイモ畑が電力会社とせんい会

社の社宅に変わり、二十九年には、市場東に鉄筋三階建の社宅もできました。

一方、敗戦の混乱の中で笠寺観音にお参りする人もめっきり少なくなっていましたが、二十四年には、戦後初めてのご開帳も行われ、夏にはぼんおどりのたいこの音がにぎやかにひびきわたりました。また、西門の六の市も年々にぎわうようになり、三十二年ごろには、市電の通りの歩道に二百もの露店がずらりとならぶようになりました。人々は、食べ物や着る物のとぼしい生活からすっかり解放されたのです。

昭和三十四年九月二十六日の夜、この地方をおそった伊勢湾台風は、風速五十メートルという強風とはげしい雨をもたらし、それがちょうど伊勢湾の満潮と重なったために堤防が切れ、学区も大きな被害を受けました。

高台では屋根の一部をはがされたり、窓をこわされた家が多く、天白川ぞいや国道西の低地は水につかりました。星崎町方面では床上浸水の被害も大きく、当時の学区全体で十人の死者を出しました。また、低地の田畑はいく日も水につかり、とり入れ前のイネや畑作物はほとんどかれてしまいました。

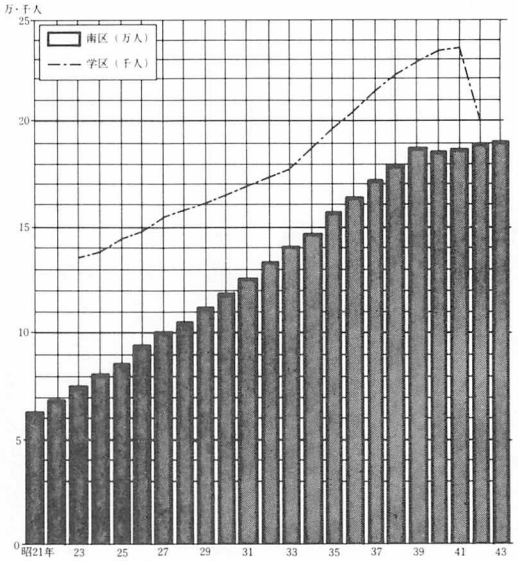
電車の線路に乗りあげた流木の山（大同町付近）

宅地化進む

昭和三十五年から四十五年ごろまでは日本の高度成長の時代といわれますが、その影響は、わたしたちの学区にもさまざまな形で現れています。

三十五年ごろまでは家がほとんどなかった天白川ぞいにも、家が建ち始め、新しく星宮町も生まれました。阿原町に名南工業高等学校ができたのは、三十七年のことです。

そのほかの地区の宅地化もいっそう進み、残っていた畑はつぎつぎに住宅に変わっていきました。三十七年には本笠寺駅前に六階建のビルが、三十八年には保健所の上に六階建の市営住宅が、四十九年には粕畑に石油会社の四階建の社宅も建ち、学区の宅地化は空に向かっても進みつつあるのです。



笠寺学区の戦後の人口

商店街の発展

笠寺西門の商店街もどんどん発展してきました。笠寺市場や六の市は学区外の人にまで利用され、くつ、電気製品などの小売店や市場の上にあるスーパーマーケットも客を集めています。ほかの地区にもスーパーマーケットや飲食店などがたくさんできました。

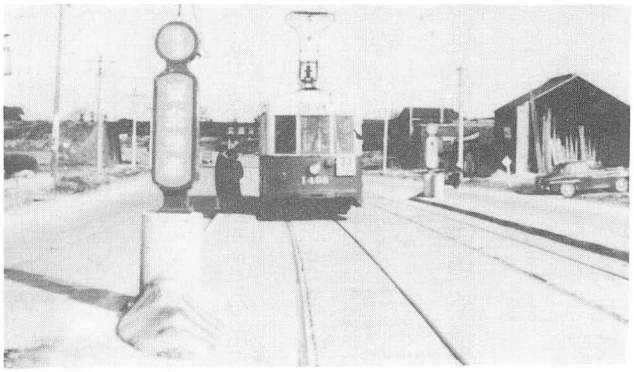
増える乗用車

一方、高度成長の波にのって学区の乗用車の数は増え続け、五十三年一月の調査（二一三世帯抽出）によると、世帯あたり約〇・七台となり、庭はけずられて車庫となりま

した。学区外から車で通勤してくる人も増え、空地の多くは駐車場と変わりました。柵下町の、ある駐車場を例にとると、四十三年に畑のすみに一台置かれたことに始まって四十四年には四台に、四十五年にはコンクリートばりになるとともに車の数もいっぺんに二十五台に増えています。こうして、虫をとって遊んだ草原や野球のできた広場はほとんどなくなってしまいました。

長い間親しまれてきた市電も、自動車の通行のじゃまになり、乗客も減ってきたので、昭和四十九年には名古屋で最後まで残っていた前浜通の路線も廃止されてしまいました。

国道をはじめ学区をつらぬく道路は、通る車が増えるにつれて、騒音、振動、排気ガスなどの公害がひどくなってきました。また、産業がさかんになるにつれ、臨海工業地帯からはき出されるガスやけむりなども増えてきました。そのため、病人も出るようになり、住みなれた家をひきはらってよそへ移っていく人も出てきました。かつては村の農業を支えてくれた中江用水（中井排水路）も、ゴミと悪臭の下水となりかけています。そうした中で、このあたりも、昭和五十一年に公害指定地区に認定されました。



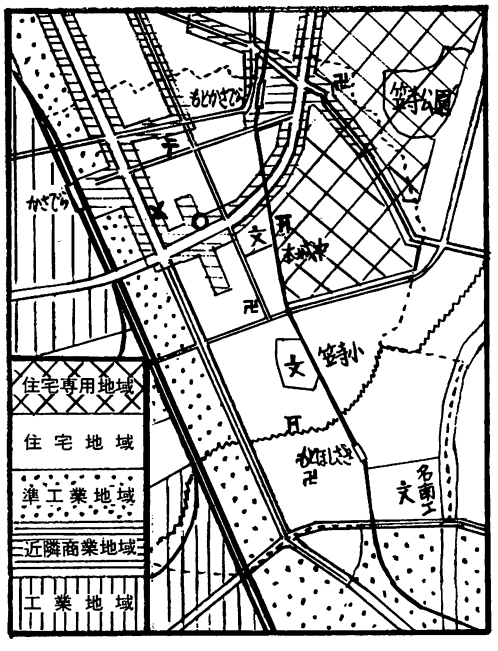
前浜通の市電

わたしたちの学区にあるさまざまな問題は、日本のほとんどの都市がかかえているなやみです。そこで、国や県や市では、それらの問題を解決するためにいくつかの法律や条例を定めたり、事業を進めたりしています。

その一つとして公害のない町にするために、空気や水をきれいにしなければならないというきまりが作られました。そのため、工場から出るけむりや水、また、自動車からの排気ガスが、少しでも少なくなるようにと研究が進められ、実行されてきました。

住宅と工場などのいりまじりをなくすために、土地を住居地域、商業地域、工業地域などに分け、住居地域には大きな工場などを建てることを禁止するきまりもできました。学区では、国道の西が「準工業地域」に指定され、西門や前浜通ぞいなどが「近隣商業地域」に決められました。

一方、緑を増やす計画も進められ、国道や前浜通に街路樹が植えられることになっています。また、中井排水路をきれいにする計画もたてられてい



笠寺学区の都市計画（市都市計画図）

ますし、よごれた水が川に流れこむのを防ぐために、下水道の整備も進められ、五十三年にはほとんどの地域で完成しました。また、本城、星宮などの低地の水はけをよくするために、ポンプ場の働きをもっと強くすることも予定されています。

ところで、住みよい町づくりを市や県などの役所にだけ任せておいてよいのでしょうか。そうではなく、学区の人たち、ひとりひとりの努力もひじょうにたいせつです。

道を歩いていると、家の前の道路をはいているおばあさんのすがたをよく見かけます。近くの公園の花に水をやるのを楽しみにしているというおじいさんもあります。家から出るゴミはきちんとふくろに入れて決められた日に出すということも守られているようです。こうした努力が積み重ねられることによって、笠寺学区は今よりもさらに住みよくなることでしょう。

また、学区に伝わる伝統や遺跡もたいせつにしたいと思います。お正月には、みんなで集まってしめかざりを燃やしている町内も多いようです。古くから住んでいる人と新しくこしてきた人が、火を囲んで語らいのときをもつ――こんなことからおたがいの心もつながってくるのでしょう。また、粕畑貝塚をはじめ、たくさんの遺跡についても、学区の人みんなが関心をもち、たいせつにしたいと思います。

元号 年 月 日　校史をたどって

1　明治維新

5　学制発布

6・11・28　星崎の正行寺に星崎学校開校

9・5　笠寺の西方院に松風学校開校

11　星崎の正覚寺に本地学校開校

19　小学校令公布

治

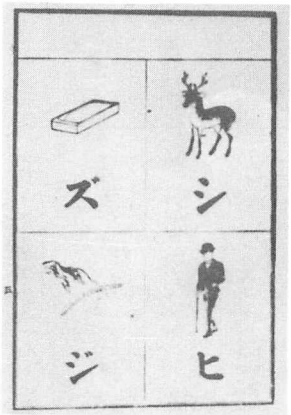
4　大門の宝寿院に、尋常小学前浜学校開校

25・11　宝寿院に笠寺尋常小学校開校

大道に星崎尋常小学校新築

30　教科書国定となる。

明



尋常小学読本（明治37年）

第三部　学校のあゆみ

一　学校ができたころ

笠寺村立笠寺尋常小学校（明25・11開校）

子どもを学校へ入れると手伝いをさせられないからという家が多く、明治二十八年になっても、半分ぐらいしか学校に入りませんでした。また、宝寿院の校舎は屋根もこわれたままで、雨が降るとかさをさして勉強しました。

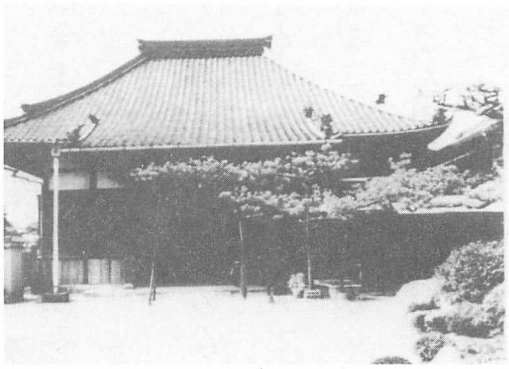
笠寺村立星崎尋常小学校（25・11開校）

大道に校舎を新築し、二十六年六月に開校式をあげました。三十六年の卒業生は、男二十四人、女十四人になりました。

そのころの勉強

読み・書き・そろばんがだいじにされ、

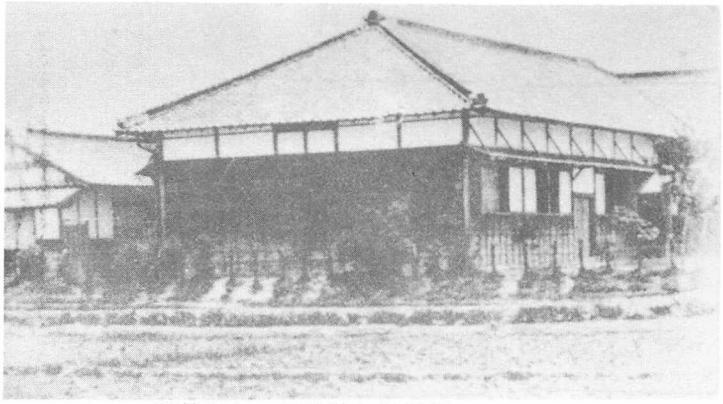
このころ学校は大道の正覚寺にあった


正　行　寺（星崎町）

明治

40・1・1三村合併により、源柴・鳴尾星崎・笠寺の四校を統合、笠寺村立笠寺尋常小学校開校

42・11・3新校舎落成記念式典挙行大展覧会開催



明治30年　星崎校と村役場
統合された時　本校にあてられた

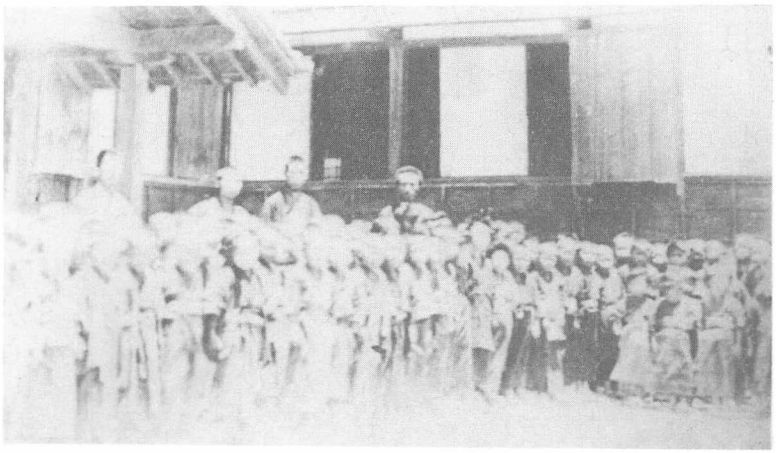
書きかたは、習字紙をとじた草紙に、まっ黒になるまで練習をしました。

二、大道に学校があったころ（明治四〇～昭和二）

笠寺村立笠寺尋常小学校（40・1開校）

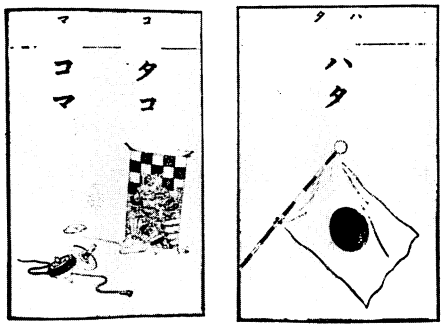
統合によって児童数は七百人ほどになりましたので、当分は古い校舎を仮教場として使いました。

大道の本校も、北校舎と南校舎二むね、職員室だけの小さなものでしたが、四十二年に、千種俘虜収容所の建物のはらいさげを受けて、校庭をかこむコの字型の校舎をつくりました。うめたての土は、村じゅうの人たちが出て、天白川から運びました。



明治30年ごろ大道旧校舎前で

明治40年夏休み復習帳（今の「夏の生活」）



尋常小学読本（明治43年）

古い校舎は障子ばりでしたから、休みの時間には、よく障子はりをしました。雨が降りだすと戸をしめましたので、へやの中はうす暗くなりました。

校庭のまん中に大きなしだれやなぎの木があって広い日かげをつくっていました。子どもたちは、夏の暑い日にはその下に集まって、男の子は馬のり、女の子はお手玉やまりつきをして遊びました。

校訓と児童手帳

明治四十五年に作られた児童手帳には、校訓のほかに、「弁当は近いところでもなるべくお持たせ下さい」とか、「衣服は必ず筒袖にして下さい」「男子には当校所定の帽子をかむらせて下さい」などと書かれています。

校訓
本気デアレ
行儀ヨクアレ
親切デアレ
勤勉デアレ

笠寺小学校児童手牒より
（明治45年）

正
3・9・1 柴田分教場を併合、父兄が反対して数日間登校させず
6・4・1 高等科設置、笠寺村立笠寺尋常高等小学校となる

大
10・8・22 名古屋市編入
名古屋市笠寺尋常高等小学校となる

笠寺小学校４年生卒業写真（明41.3）

勉強のようす

あいかわらず、読み・書き・そろばんが中心でしたが、明治の終わりごろには、高学年では理科の実験もとり入れられ、アルコールを燃やしたり、発電機で電気を起こしたりしました。

音楽のことを唱歌といい、授業では歌うことが多く、先生のオルガンにあわせて「春の小川」や「はとぽっぽ」を歌いました。

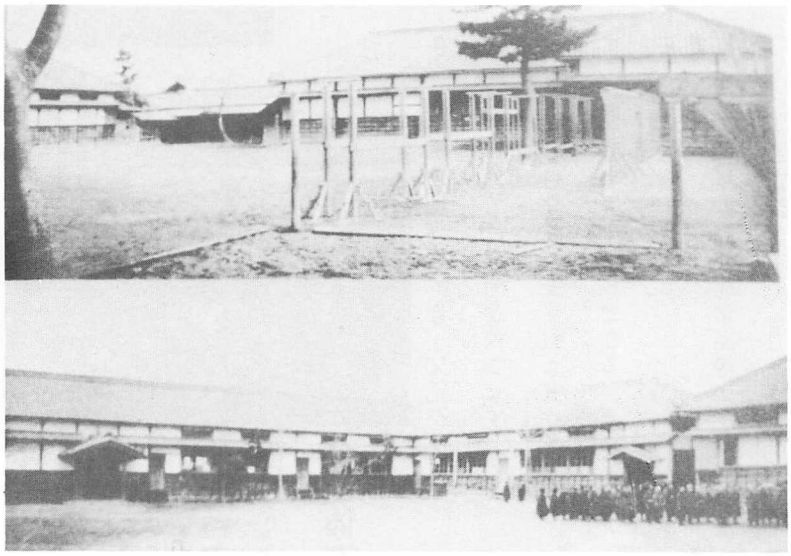
また、図画の時間にはお手本のまねをして家や木をかきました。また、天白川の堤防へ行って鉄橋や大高の山の写生もしました。

体育の名門校かさでら

体育には特に力が入れられ、鳴海小学校で開かれた徒手体操の大会に参加したこともありました。また、大正十年ごろには器械運動もさかんになり、とび箱の開脚とびや閉脚とび、台上前転などもやりました。

大正時代の学用品

12・3　現在地に地鎮祭　工事着手
8　一部児童新校舎に移る
13・4・1　鳴尾町柴田に鳴尾分教場設置
15・7・1　名古屋市笠寺青年訓練所開設



大道にあった校舎（大正11年）

運動会はまるで村じゅうのお祭りのようで、どの家でも、すしや、にものを重箱につめて、朝早くから学校の庭に集まりました。そして、むしろにすわって、徒手体操、ぼうたおし、ぼうしとりなどを見物しました。おやつにかんだサトウキビのからが山のようになって、後始末に苦労しました。

遠足

目的地は、中根のぼたん園、鳴海の相生山、八事山、名和の聚楽園などで、どこへでも歩いて行きました。塩のついた焼きおむすびを、ふろしきで肩からななめにせおい、天白川の堤をてくてく歩きました。

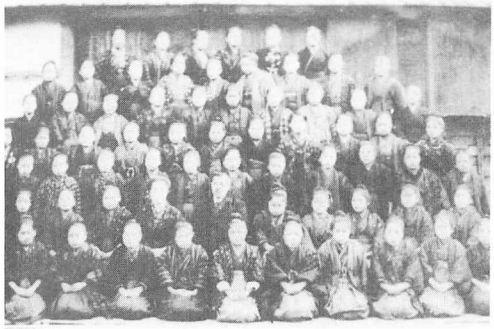
増え続ける子どもたち

都市化の波を受けて子どもたちの数は増え続け、明治四十年の合併当時は七百人にすぎなかった児童数が、大正十二年には千三百五十人にふくれあがりました。

大正

2・11・14 天皇陛下市内行幸奉送迎

大正11年3月の卒業生（男子）



大正11年3月の卒業生（女子）

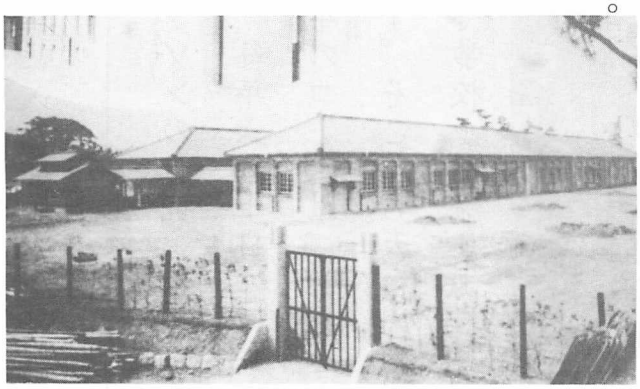
そこで、もっと広い所に学校をつくることが計画され、今のこの場所（城山）が選ばれたのです。当時、城山は、大部分がクワ畑で、大根畑もありました。東の方には天守閣あととよばれる小山があり、そこに日清、日露戦争でなくなった人の忠魂碑が建っていました。

三　今の場所に校舎ができたころ

（昭和三～一五）

新校舎にうつる

工事は完成までに五年もかかりましたから、一つの校舎ができると高学年からじゅんじゅんに移りました。ひっこしのときには、二人用のこしかけをせなかにせおったり、二人でつくえを持ったり



建築中の新校舎（大正13年）

昭和

3・11　新校舎完成　普通教室24、特別教室4、職員室、小使室、奉安室、その他

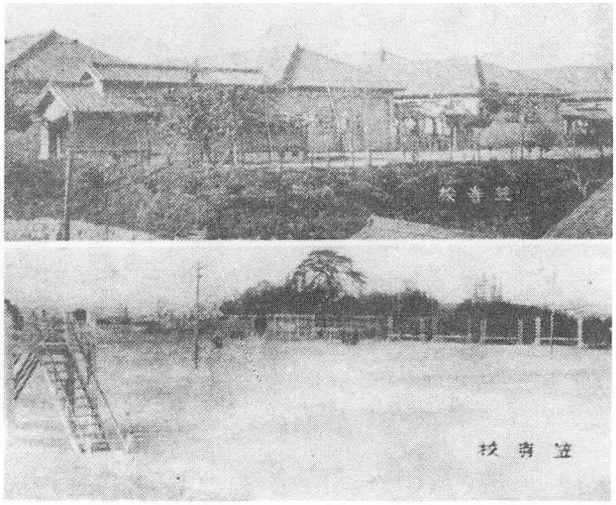
4・8・19 奉安殿落成

7・1・16 午前二時ごろ職員室より出火　職員室・宿直室全焼、応接室半焼

7・9・23 満州国承認祝賀式高学年旗行列

昭和

9・4・9 若山部隊歓送
4・10 二宮尊徳像建立（卒業生寄付）
4・23 教員精神作興大会
10・10・1 青年学校開設
11・1 増築校舎（六教室）完成
5・5 講堂落成式（小菅剣之助氏寄付）
5・11 講堂落成記念唱歌会



して、星宮社の坂を上って新しい校舎に入りました。

マラソン大会

あいかわらず運動がさかんで、マラソンの対抗試合ではつぎつぎに優勝を重ねました。また、毎年六月十日には校内マラソン大会が行われました。高学年のコースは、学校を出発して阿原堤を走って大慶橋に出ます。そこから天白川の堤を走り、東海道の新町から南におれて学校まで帰りました。高台の学校からは全コースが見わたせました。

修学旅行

子どもたちがいちばん楽しみにしていたのは修学旅行です。大正の初めごろは岐阜の金華山への日帰り旅行でしたが、昭和に入ってからは伊勢への一泊旅行になりました。出

洋服すがたもめだつ
（昭和６年の４年生）

昭和

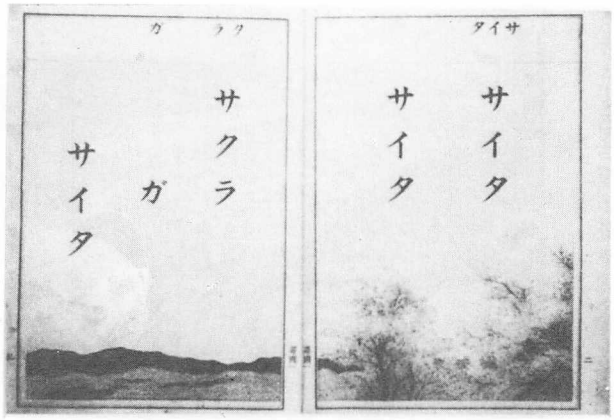
12・4・3 戦役事変関係者表忠壇除幕式挙行

13・7・4 鳴尾分教場が白水小学校として独立

11・3 白水小学校分離式挙行

15・7・7 支那事変三周年記念式挙行

10・30 教育勅語発布五十周年記念式挙行



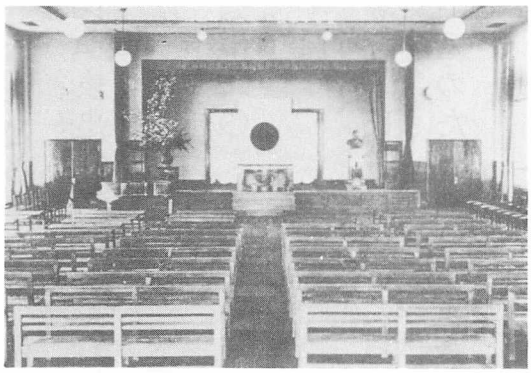
小学国語読本（昭和8年）

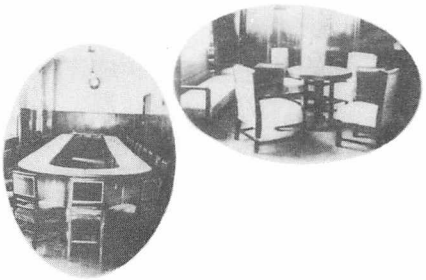
発の朝は暗いうちに家を出て大高の駅まで歩き、はじめての汽車に乗りました。

講堂完成

十一年には講堂ができました。それまでは教室の間のしきり戸をとりはずして式場に当てていましたから、校長先生の声も後ろまでとどかず、また、せまいところに大勢入るために式のとちゅうで気分の悪くなる児童も何人かあって、何とかしたいと考えていたのです。

初めは木造の予定でしたが、ちょうどそのころ京阪地方をおそった室戸台風で多くの学校がこわされたために、急に鉄筋に変えられることになり、今も残っているりっぱな講堂が建てられたのです。


竣工当時の講堂（現存）内部正面


▲貴賓室
◀会議室

和

16・4・1名古屋市笠寺国民学校となる

昭

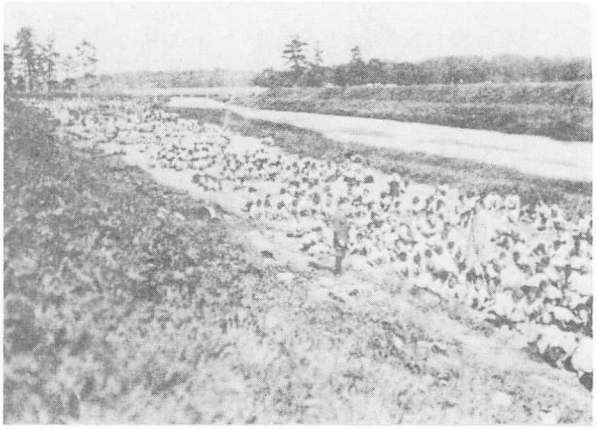
12・8太平洋戦争（第二次世界大戦）始まる

17・4・1軍人援護教育研究校に指定

7・25県農会長より食糧増産につき表彰される

11・12忠霊室設置

18・4・1名古屋市武道研究校に指定



天白川原錬成農場のいもほり（昭16）

講堂建設のためにとりのぞかれた忠魂碑は、運ぶとちゅう二つにわれたため校庭のすみにうめられ、その上に「表忠壇」がつくられました。それがシンボルゾーンとよばれているあの建物なのです。

四、戦争がはげしくなったころ（昭和一六～二〇）

名古屋市国民学校

十六年四月からは、校名も「名古屋市笠寺国民学校」と変わり、勉強をするのも体をきたえるのも、すべて国のためという教育がおしすすめられるようになりました。

天白農場

天白川のあれ地をかいこんして、「農士魂錬成農場」とよぶ畑をつくりました。天白橋から大慶橋まで続く広いもので、一万平方メートルもありました。子どもたちは、先生のあけたあなにコムギを一つぶずつまいたり、一列にならんでサツマイモのなえを植えたりしました。また、大きい子どもたちは、学校の便所からくみとったこえをかついで農場まで運びました。

和

18・4・1 笠寺男子青年学校廃止

5・11 県内政部長体練科少年団訓練状況視察

9・13 市長学校施設天白農場視察

昭

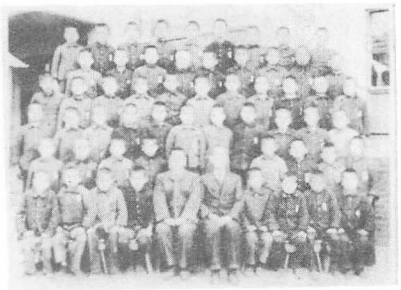
19・4・1 又兵衛分教場設立

給食始まる

8・11 本郷町へ集団疎開出発

9 高等科児童勤労学徒として各工場に動員される

12・7 御真影・勅語市役所へ奉還



国民学校時代（昭17卒業生）

ブタをかう

現在のプールの北側にブタ小屋があり、多いときには十ぴきぐらいかっていました。農場でとれたイモのつるや町内ごとに持ち寄ったやさいくずなどをえさに高学年の児童がこうたいでせわをしていました。終戦近くなってからは、ブタもすっかりやせてしまい、ウサギのようにピョンピョンとび回ったそうです。

運動場が広くなる

十九年には運動場が広くなりました。それまでは校庭は今のシンボルゾーンのあたりまでしかなく、北側はクワ畑になっていました。子どもも先生も力を合わせて土ならしなどを手伝いました。

警報が出るたびに

敵の飛行機が来るという知らせが入ると、すぐに分団ごとに集合して家に向かいます。不気味なサイレンの音の中を大きい子は小さい子の手をひいて走ります。とちゅう飛行機の音が聞こえる

昭和

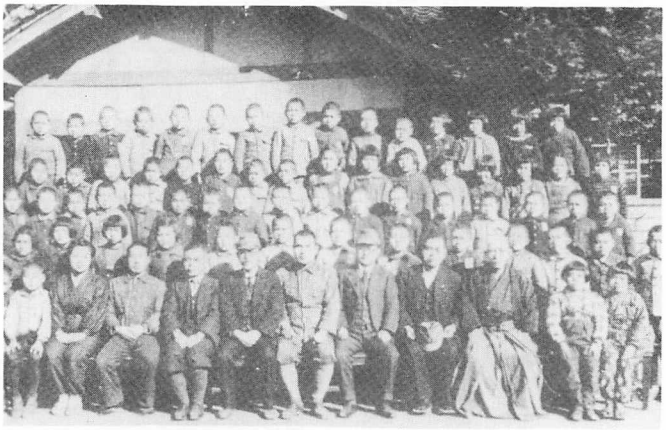
19・12・18敵機来襲　運動場に爆弾一個落下

20・4・1初等科を閉鎖

5・1残留児童のため分教場開設

初等科の閉鎖をとく

20・5・17敵機の空襲を受け、講堂・教室3などを残して焼失



集団疎開　北設楽郡本郷町（昭20）

と、みぞの中にふせます。なきだす一年生をなだめなだめ家にたどりついたときには、服も手もどろだらけになっていました。

集団疎開

十九年八月十一日、三年生以上の希望者が北設楽郡本郷町へ集団疎開のために出発しました。その日の朝、着がえや日用品をつめたリュックをせおって国鉄笠寺駅に集合しました。見送りに来た母親の手をにぎってなきだす子もいましたが、先生にはげまされて汽車に乗りました。

疎開地ではお寺や旅館に分かれて生活し、毎日遠い道を歩いて本郷の小学校に通いました。ごはんはダイズの中にお米が少しまじったものでしたが、野山からつんできたセリ、フキ、ヨメナなど、何でも入れて食べました。「おなかいっぱいごはんが食べたい。」というのがただ一つの願いで、父母との面会日を、みんな指おり数えて待っていました。

お寺や公会堂に分かれて

昭和

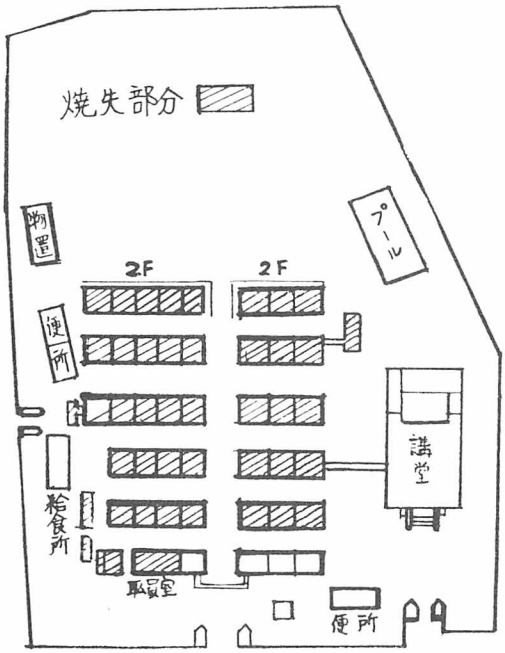
20・7・10 大日本教育会名古屋支部主催
天白農場視察会
8・15 終戦
8・15 高等科児童工場動員解除
10・18 初等科集団疎開児童帰る
10・18 授業再開
21・7・2 新校舎建築着工
22・3・15 校舎竣工
校舎平屋建三棟、職員室、小使室、物置、給食所、便所

防空ずきんをかぶって

二十年に入ると疎開はさらに進められ初等科は閉鎖されましたが、残っている児童のためにお寺や公会堂に分教場が開かれました。小さい子どもたちが肩から防空ずきんをかけ、いすにするみかんばこを持って集まりました。むねには住所や血液型を書いた大きな名ふだをつけています。その子どもたちも、日ごとに減っていきました。

校舎全焼

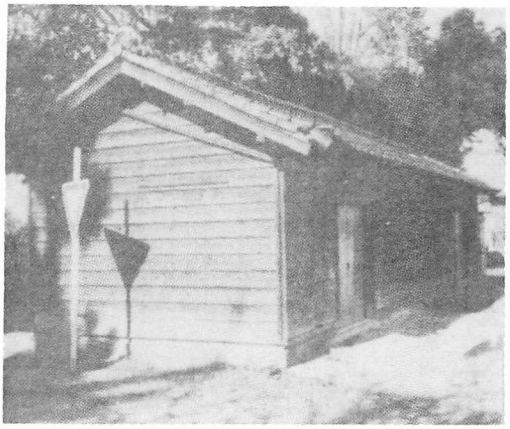
昭和二十年五月十七日夜明け前の大空襲によって、わたしたちの学校は焼けてしまいました。そのころは、いざというときに備えて警防団の人がこうたいで番をしていましたが、三十六発一たばの焼い弾に手のほどこしようもなく、燃えるにまかせて朝を待ちま



校舎焼失図（////// は焼失部分）

昭和22

教育基本法公布
六・三制実施、義務教育九年に延長
3・15平屋建校舎三棟、職員室、小使室、物置、給食場完成
4・1名古屋市立笠寺小学校と改称
4・1本城中学校新設（本校に併設）
放出かんづめ・脱脂粉乳の給食始まる


教室に使われた物置（体育倉庫）

した。明けがた近く校舎は焼けおちましたが、昼間になっても燃え続け、前の道は熱くて通れなかったそうです。

五、たち上がる笠寺小学校

授業再開

二十年八月十五日に戦争が終わり、十月十八日には授業が再開されました。

講堂は四つにしきられて教室になりました。ついたてや戸だなをならべただけでしたから、となりで音楽が始まると先生の声も聞こえなくなりました。ステージのうらも職員室と教室になりました。今の体育倉庫も教室になりました。窓にはガラスもなく、戸口からは雪のふきこむこともありました。はいているタビの先はこおり、手はこごえました。

どん底のころ

水野賢劭（当時の校長先生）

○赴任直後、職員の欠員十四名と聞いていささか驚いた。鉄のわらじをはいて先生をさがし歩かねばと思った。

○欠席児童は毎日六十数名。五、六分の集会でばたばたおれる子どももいた。もちろん欠食教師もいた。天白川原の農場がすばらしく役にたった。

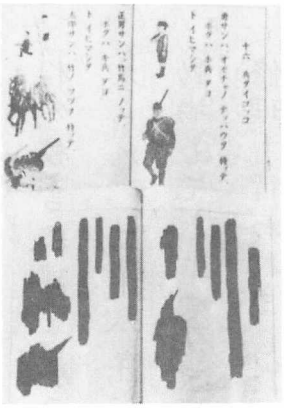
○日没とともにドライバーを持ってガラスを盗みにくるやからを追っぱらったり、弁当むし器をかつぎ出したところをとりおさえたこともあった。

23・4・1又兵衛分教場大生小学校として独立
7・15校舎増築（七教室・二階建）完了
24・10・31本城中学校校舎竣工移転
完全給食始まる
和27・8・15運動場改装竣工
28・3・31校地北側の擁壁竣工
7・13四教室増築竣工
10・25スタンド式運動場完成
12・5運動場改装、四教室増築、職員室・応接室改築完了
昭33・6・21六教室増築、職員室・宿直室小使室・衛生室改築
34・2・18五十周年記念式典挙行
新校歌発表
記念展覧会開催
「むかしと今のかさでら」発行

二部授業

低学年の子どもたちは、お寺や公会堂を借りて勉強しましたが、学年によっては、午前と午後に分かれて二部授業をしました。全員が学校で勉強できるようになったのは、二十年三月に平屋建三むねの校舎ができ上がってからのことです。

すみぬり教科書



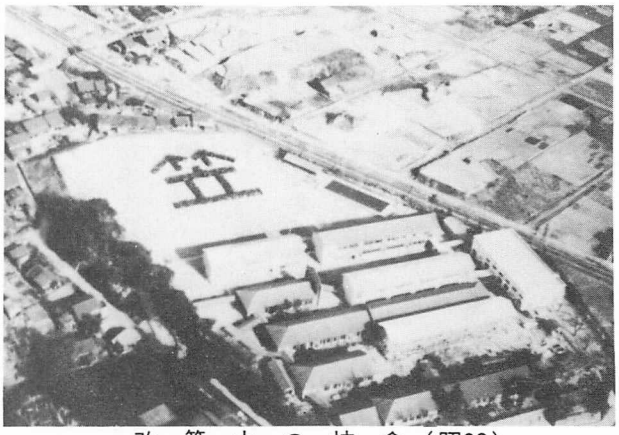
すみぬり教科書

占領軍の命令によって戦争に関係のあるところはすみでぬりつぶしました。また、新しく配られた教科書は、うすいざら紙に印刷された新聞紙のようなもので、自分で切ってとじて教科書を作りました。

日帰り修学旅行

二十一年には岡崎と豊川稲荷へ修学旅行に行きました。マメやイモの入ったごはんに少しだけしょうゆあじをつけたおむすびが

34・3・31三教室改築
9・26伊勢湾台風襲来
35・7・28四教室改築
和36・8・31給食所新築
37・3・12二教室・中央廊下改築
昭
南区マラソン大会十連勝
41・7・23本プール改修、徒渉池・機械室完成


改築中の校舎（昭32）

大部分の子どもたちのおべんとうでした。先生は、はんごうに入れてきたぞうすいをすすっていました。

新校舎完成と設備の充実

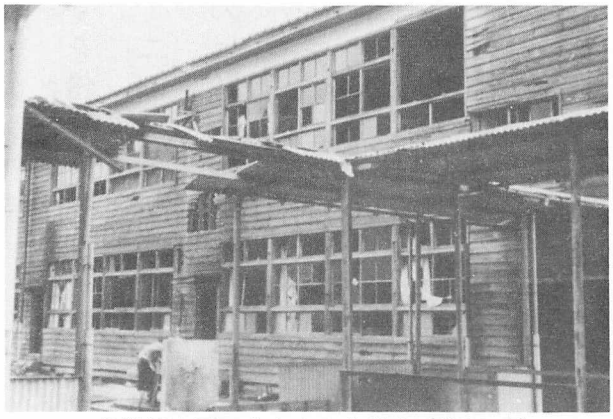
二十二年三月にやっと平屋建三むねの校舎ができ上がりました。二十三年、二十八年と増築が行われ、三十二年には二階建四むねの校舎に建て直されました。その他の設備もしだいに整えられ、二十八年にはスタンド式運動場もでき上がりましたし、講堂の大修理も行われました。二十九年に入ると、給食調理所も改築され、三十年には新しい放送設備も備えられました。

六、発展する笠寺小学校

（昭和三〇～　）

創立五十周年を祝う

三十四年二月十八日には、創立五十


伊勢湾台風であらされた校舎（昭34.9）

和

42・4・1 星崎小学校独立
生き物の学習園完成

44・3・25 鉄筋校舎増築工事完成
教室2・理科室・準備室

45・2・10 市教育委員会主催交通安全教育研究協議会開催

4・1 交通安全教育研究校に指定

46・3・31 鉄筋北校舎増築工事完成
教室4・仮渡廊下

47 全教室にテレビ配置

昭

49・4・1 芝町に分校設置

51・4・1 芝町の分校が笠東小学校として独立

51・9・17 南区連合運動会優勝

11・1 七十周年記念学芸会実施
七十周年記念事業として笠寺アルプス改修

53・3・31 遊具タワーブリッジ設置

9 校舎改築始まる

マラソン10連勝

▲50周年記念展覧会

◀交通安全教育

▼70周年記念運動会

周年を祝う行事が行われ、今歌われている校歌も発表されました。

区分	時代	日本のあゆみ	笠寺学区のおもなことがら
大昔の世の中	縄文	かりやりょうをしてくらす	・粕畑貝塚
	弥生	米を作るようになる	・下新町遺跡　・市場遺跡
		今から二千年ぐらい前	・本城町遺跡（集団墓地のあと）
	和	日本の国がまとまる（大和朝廷）	
		大きな墓がつくられる	・神興塚、徳願塚などの小古墳　・本城町低地遺跡
貴族の世の中	大	今から千二百年ぐらい前	
		新しい政治が始まる	
		大化の改新（六四五）	
		大宝律令ができる（七〇一）	
	奈良	奈良に都ができる（七一〇）	・尾張の国が八つの郡に分けられ（その一つが愛智郡）愛智郡に十郷あり、千竈郷の中に笠寺など七つの村がふくまれる
		東大寺の大仏ができあがる（七五二）	・小松寺（笠寺観音）ができる
	平安	京都に都が移る（七九四）	・玉照姫が観音様の本堂を今の地に建てる（笠覆寺）
		藤原基経が関白となる（八八〇）	・星崎荘ができる
中の	鎌倉	貴族が遊びくらす	
		今から八百年ぐらい前	・僧阿願が笠覆寺を再興（一二三五～一二五五）
		源頼朝が鎌倉に幕府を開く（一一九二）	
		武士が勢いよくなる	・笠寺城・市場城などができる
	室町	足利尊氏が京都に幕府を開く（一三三八）	
		織田信長が室町幕府をたおす（一五七三）	・桶狭間の合戦（一五六〇）
	桃山	豊臣秀吉が日本中を治める（一五九〇）	・星崎城・阿原堤できる。 ・笠寺台地の西の方で塩をつくる

世の中	武士の世
新しい世の中	武士の世
昭和 / 大正 / 明治	江戸 / 安土

今から四百年ぐらい前

徳川家康が江戸に幕府を開く（一六〇三）

東海道五十三次ができる

元禄文化がさかえる

文化文政の文化がさかえる

江戸幕府がほろぶ（一八六七）

今から百年ぐらい前

江戸を東京と改める（一八六八）

廃藩置県（一八七一）

新橋と横浜の間に鉄道が通じる（一八七二）

東海道本線が全線開通する（一八八九）

市町村制がしかれる（一八八九）

第一次世界大戦が起こる（一九一四）

太平洋戦争が起こる（一九四一）

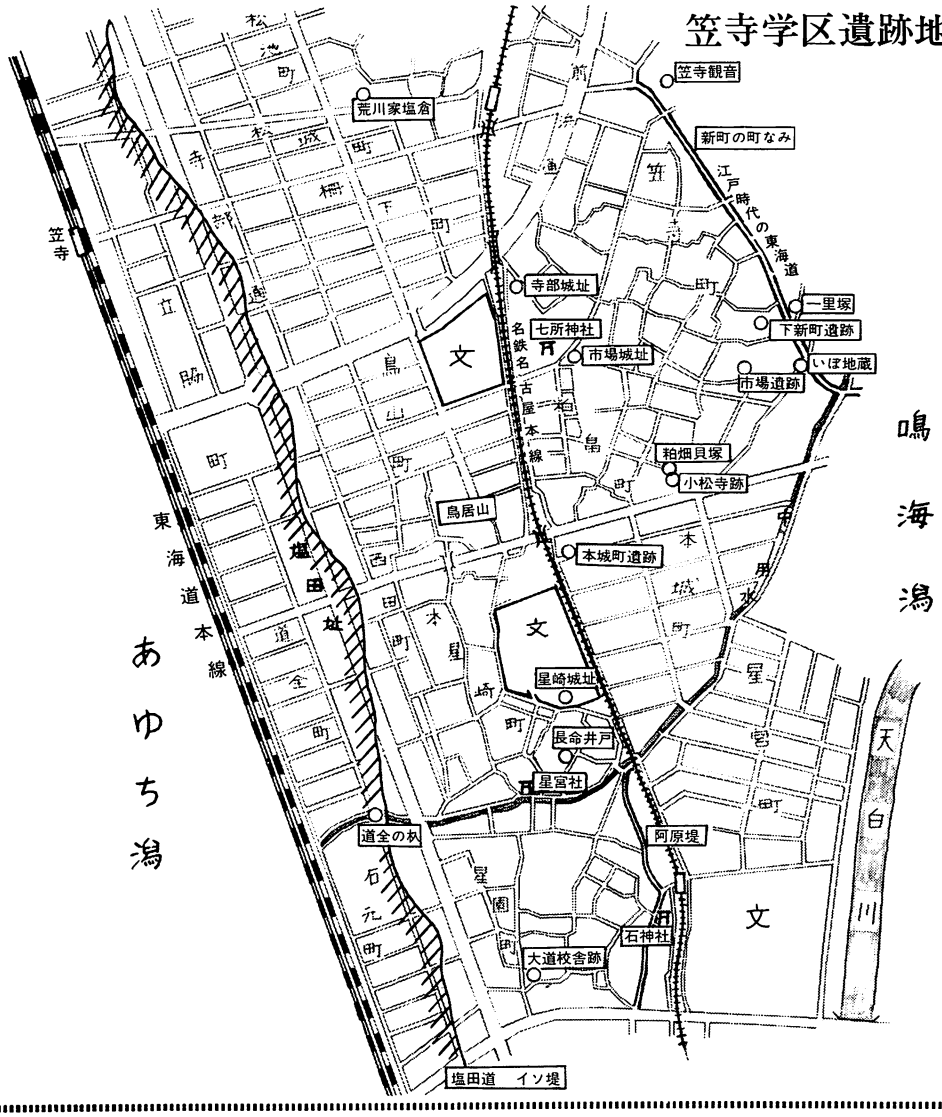
第二次世界大戦が終わる（一九四五）

東京オリンピックが開かれる（一九六四）

（　）内の数字は西暦年数を示す

- 東海道に松が植えられ一里塚がつくられる
- 笠寺台地の西の方がうめられ新田が開かれる
- 俳句がさかんになり句碑が建てられる
- 天白川はんらん
- 天白川大改修（一七八〇）
- 名古屋県、後愛知県となる（一八七二）愛知郡にふくまれる
- 武豊より清洲まで汽車が走るようになる（一八八五）
- 笠寺村、星崎村と鳴尾村が合併して笠寺村となる（一九〇六）
- 愛電（後の名鉄）神宮前―本笠寺間が開通する（一九一七）
- 笠寺村が名古屋市南区に入る（一九二一）
- 市バス（鶴舞公園―笠寺）が開通する（一九三一）
- 区画整理が始まる
- 新道（国道一号）ができ（一九三九）本星崎まで市バスがくる（一九四〇）
- 国鉄笠寺駅が仕事を始める（一九四三）
- 市電が笠寺西門から大江の方へのび前浜通を走るようになる（一九四四）
- 国道一号に新大慶橋ができる（一九四四）
- 伊勢湾台風により風水害を受ける（一九五九）
- 区画整理がおわり、新しい町が生まれる
- 新幹線が開通する（一九六四）
- 市電（笠寺―大江）が廃止になる（一九七四）

笠寺学区遺跡地図



主として、次の文献を参考にさせていただきました。厚くお礼申し上げます。

書名	著・編者名
愛知郡誌	愛知郡役所
名古屋南部史	名古屋南部史刊行会
寛文村々覚書	名古屋叢書
尾張徇行記	名古屋叢書
南区今昔物語	山田寂雀
下新町遺跡	三渡俊一郎・増子康真
星崎の塩	加賀宣勝
知多街道	池田陸介
鳴尾村史	永井勝三
古老談義(一)(二)(三)	南区郷土文化会
名古屋鉄道社史	名古屋鉄道
名古屋の遺跡百話	文化財叢書(市教委)
星崎の塩浜	星崎塩浜資料保存会
尾張名所図会	愛知県郷土資料刊行会
大正昭和名古屋市史	名古屋市役所
わたしたちの愛知県史	愛知県郷土資料刊行会
愛知県の歴史	塚本　学・新井喜久生
松巨嶋	久野園吉
南区郷土文化写真集	南区郷土文化会
愛知県教育史	愛知県教育委員会
南区の原始―古代遺跡	文化財叢書(市教委)
名古屋のおいたち	吉田富夫
南区郷土史	南区教育振興会
第三次名古屋市短期計画	名古屋市
総合名古屋市年表	名古屋市会事務局

あとがき

開校七十周年を迎えた本校では、「かさでら」のことを、もっとよく知ってもらおうという願いをこめて、児童向き郷土読本の作成を企画いたしました。

編集にあたっては、三十四年既刊の「昔と今のかさでら」を土台にさせていただくことにしました。学区をくまなく歩き、家・商店・工場等の所在を確かめるとともに、道路の利用度の調査もいたしました。また、旧跡や古い道・用水あとなどを回る一方、図書館の文献で事実の確認に努めました。近年の歩みについてはもっぱら各世代の方々のお話をお聞きしてつづることにいたしました。三年がかりで、やっとまとめあげることができました。

非力なわたくしたちが、とにかく、こうして一冊の本にまとめあげることができましたのは、何回かの取材にも快く応じて下さったおとしより、「大事なことだからがんばりなさいよ。」と面倒をいとわず、資料を探して貸して下さった方々のおかげです。改めて心からお礼申し上げます。

わたくしどもがこの仕事を進める中で、とりわけ感銘を深くいたしましたのは古老とよばれる方々のお顔の優しさと、語られるおことばの温かさであります。ひとりひとりの生きてこられた道すじは違いますが、どなたからも、かさでらの歴史と伝統を担ってきたという誇りと、この町を今よりもよくしたいという熱いお気もちが伝わってまいりました。

この本が郷土理解の一助となり、かさでらのよき伝統や古老の気概を受け継ぐきっかけともなれば幸いです。

昭和五十四年三月一日

編集委員一同

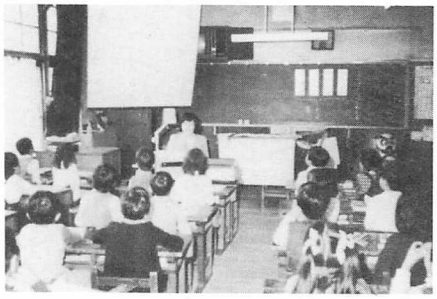
昭和五十二・五十三年度 在職の先生

校長　神戸文雄　鈴木博
教頭　加藤鳳璋　高橋ノブ
教頭　亀山照哉　高橋ひろ子
竹内弘三
浅野久子　田中武志
東俊雄　中村忍
井川成子　原山篤子
石川せつ　判治弘雄
伊藤定雄　坂野幸美
稲垣愛　蛭川きくみ
稲浪智寿子　福島敦子
上田仁　星谷としゑ
鵜飼春美　堀田重臣
内田栄治　堀英世
太田清光　水野修一
大山秀雄　水野比佐光
奥田聰子　三宅牧子
川崎都子　守屋信子
久野敏子　山来香
小久保文子　山田いつ
小寺高志　山田系子
酒井恵景　吉田亘
坂口洋子　脇田俊昭
杉浦明美
杉浦きよ子
（五十音順）

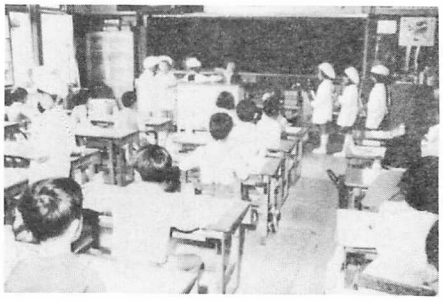
編集　名古屋市立笠寺小学校
昭和五十四年二月十五日印刷
昭和五十四年三月一日発行
発行　名古屋市立笠寺小学校PTA　代表者　神戸文雄
印刷所　加藤印刷
発行所　名古屋市南区鳥山町一丁目七番地　〒四五七　電話八二二―五四九七番
名古屋市南区本城七六五番　〒四五七　電話八二一―五一八八番
名古屋市立笠寺小学校PTA　代表者　大橋禎

非売品

機器を使っての授業

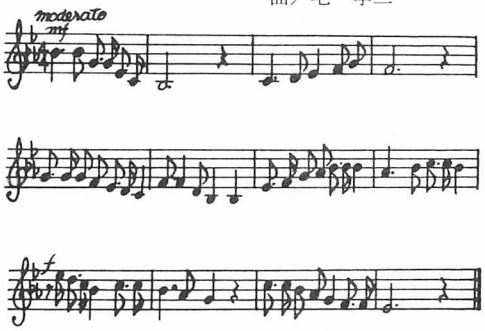


楽しい給食



校　歌

詞／山崎敏夫
曲／宅　孝二

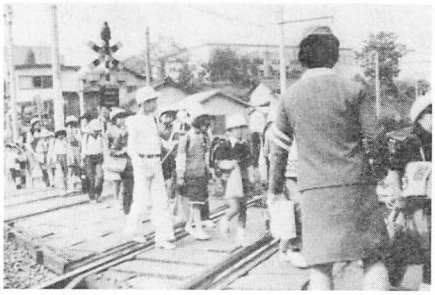


1　朝日　かがやく国道に
　明るくひらく　白き窓
　正しきこころ　一すじに
　誓いは新し　笠寺小学校

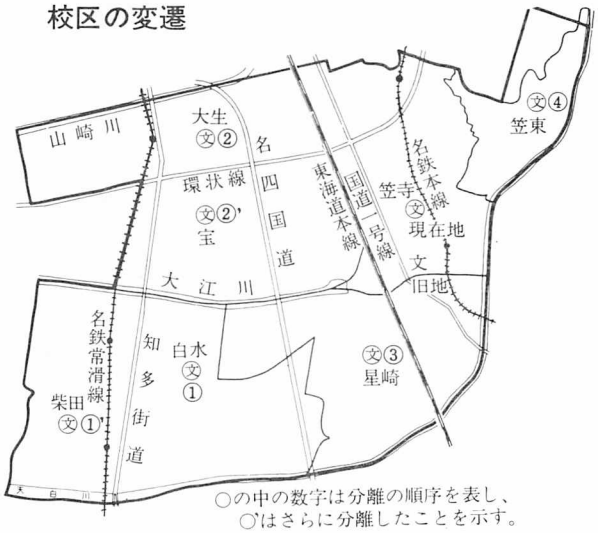
2　流れも清き　天白を
　のぞみて高き　まなびやに
　つとめて常に　むつまじく
　歴史ははるけし　笠寺小学校

3　星のまたたく　城あとに
　かすかに汐は　匂いくる
　きたえて強く　すこやかに
　希望はのびゆく　笠寺小学校

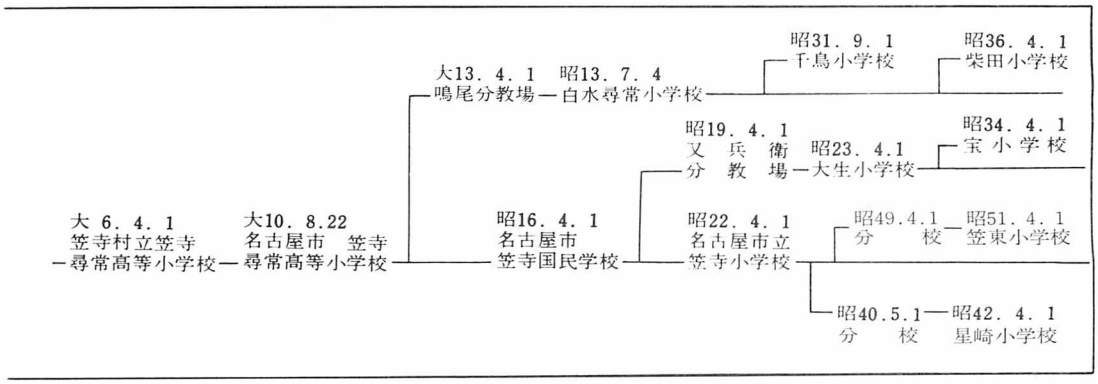
集団下校



校区の変遷

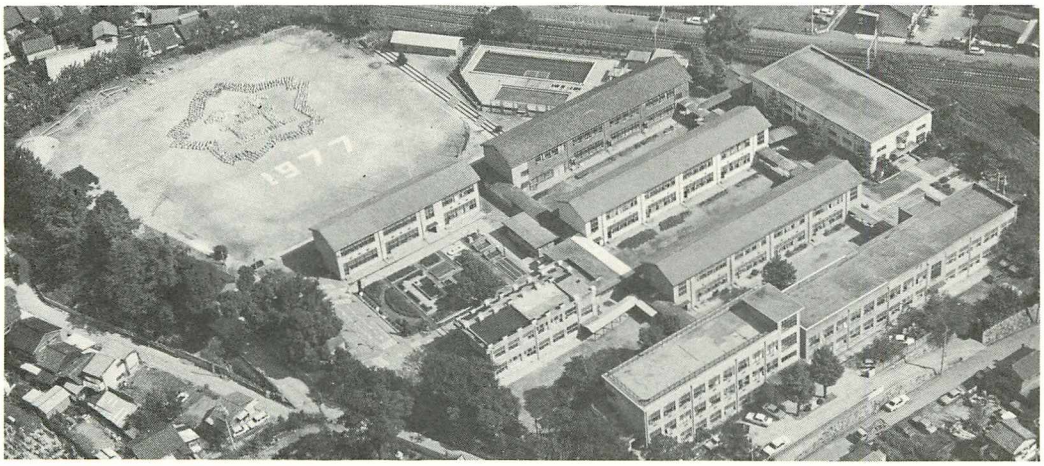


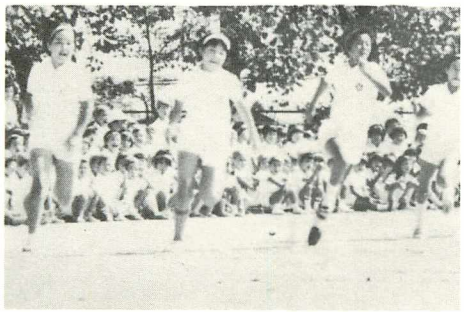
○の中の数字は分離の順序を表し、
○'はさらに分離したことを示す。



現況

学級数	36学級	教師数	42人	給食調理員数	5人
男子児童数	785人	事務職員数	2人		
女子児童数	664人	用務員数	2人		S53.2.1 現在





運動会

野外教育活動

展覧会

修学旅行

沿革

明6.11.10 第二十一番小学隆訓学校（柴田弘法堂）

明6.11.28 第二十番小学星崎学校（正行寺）

明9 白水学校

明11.12 星崎分教場

明12.5.10 鳴尾学校

明11 星崎学校

明11 本地学校（正覚寺）

明9.5 松風学校（西方院）

明20.4 愛知郡尋常小学鳴尾学校

明20.4 尋常小学前浜学校（宝寿院）

鳴尾分校

明25.11 鳴尾村立源柴尋常小学校

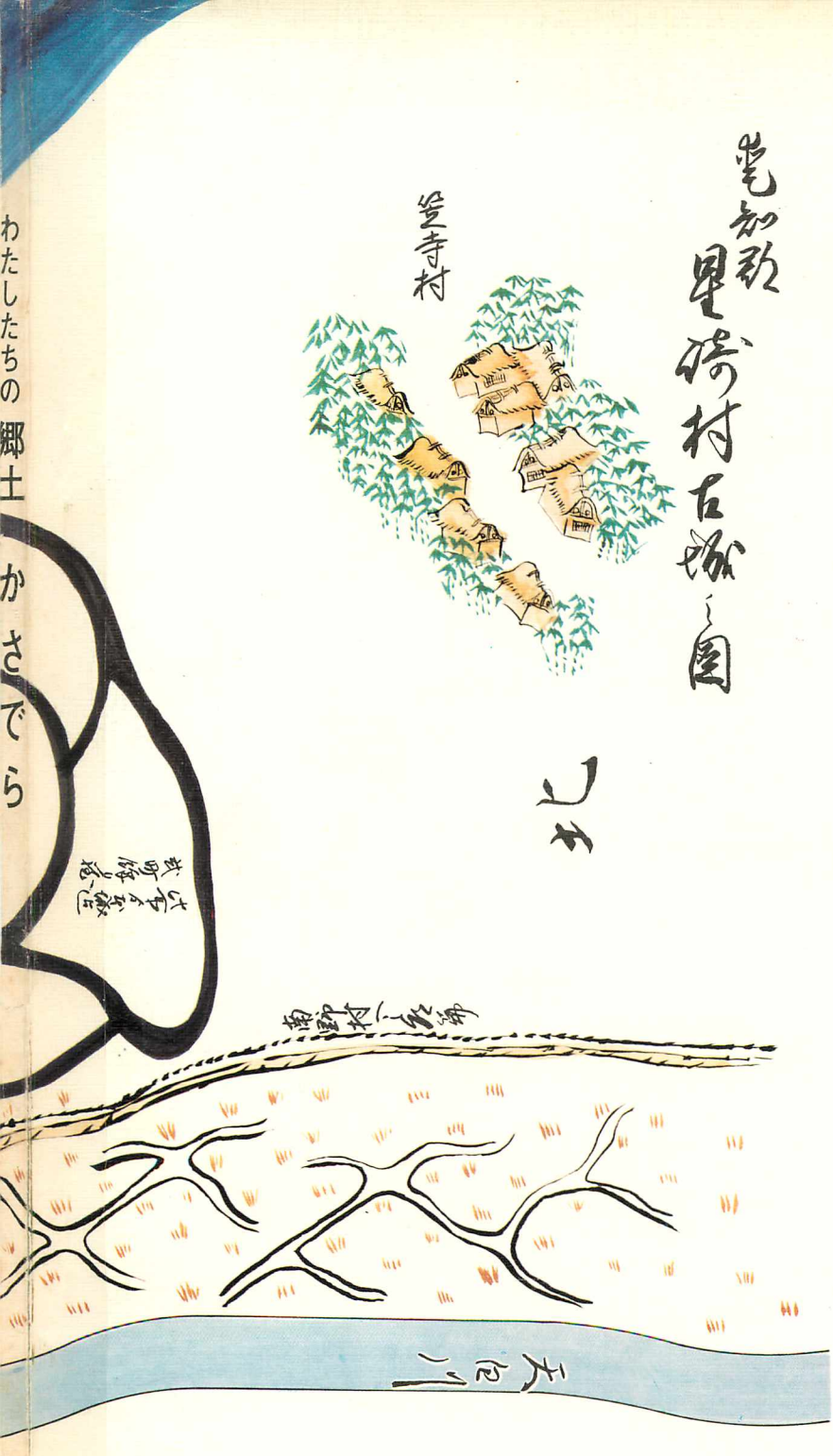
明25.11 鳴尾村立鳴尾尋常小学校

明25.11 星崎村立星崎尋常小学校（大道）

明25.11 笠寺村立笠寺尋常小学校

明40.1.1 笠寺村立笠寺尋常小学校

わたしたちの郷土 かさでら



名古屋市立笠寺小学校